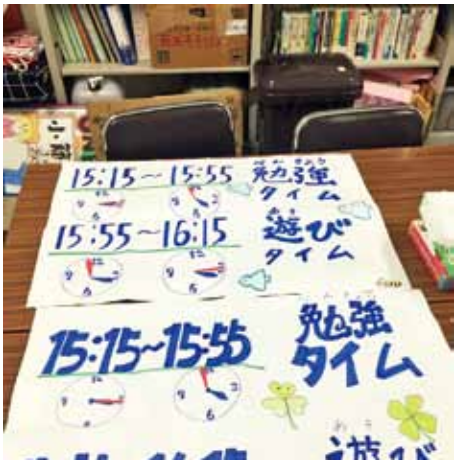
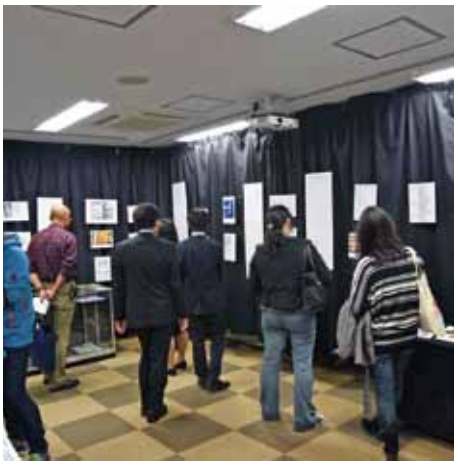




平成 28 年度

静岡大学地域連携応援プロジェクト

成果報告書

国立大学法人静岡大学
イノベーション社会連携推進機構
Organization for Innovation and Social Collaboration

目　　次

◆巻頭言　静岡大学地域連携応援プロジェクトについて ―― 2
阿部 耕也｜イノベーション社会連携推進機構 地域連携生涯学習部門長

平成 28 年度静岡大学地域連携応援プロジェクト 成果報告

1．鷲山恭彦家文書（掛川市）の調査・保存事業 ―― 3
〈代表者〉橋本 誠一｜人文社会科学部 教授

2．静岡県内の高校教員と連携した地歴教員養成・支援プロジェクト「地歴教員養成講座」―― 5
〈代表者〉藤井 真生｜人文社会科学部 教授

3．愛鷹山麓出土の旧石器資料に関する展示コンテンツの開発 ―― 7
〈代表者〉山岡 拓也｜人文社会科学部 准教授

4．大学と保護者と親の会の連携による発達障害児への学習等支援活動「きんもくせい土曜教室」―― 9
〈代表者〉大塚　玲｜教育学部 教授

5．富士市の小学校教諭と協働する造形ワークショッププロジェクト ―― 11
〈代表者〉川原﨑 知洋｜教育学部 准教授

6．子どものレジリエンス（精神的回復力）を育てる「富士山モデル」の実践 ―― 13
〈代表者〉小林 朋子｜教育学部 教授

7．静岡赤十字病院小児科外来における壁面制作プロジェクト ―― 15
〈代表者〉髙橋 智子｜教育学部 准教授

8．島田市伊久美の地域活性化に向けた商品開発 ―― 18
〈代表者〉竹下 温子｜教育学部 准教授

9．〈多文化共生〉放課後わくわくクラブ ～勉強と絵本でつながる子どもの輪～ ―― 21
〈代表者〉矢崎 満夫｜教育学研究科 准教授

10．英語力向上に関する地域連携モデルの教材化および静岡県域への拡大に対するサポート事業 ―― 24
〈代表者〉山﨑 保寿｜教育学研究科 教授

11．掛川市横須賀の在来作物「ニンジンイモ」継承のための「いいものねっこプロジェクト」 ―― 26
〈代表者〉富田 涼都｜農学部 准教授

12．浜松市における自然・歴史観光のためのインタープリター育成教材の開発事業 ―― 28
〈代表者〉杉山 岳弘｜情報学部 教授

13．障害者就労支援事業 ―― 30
〈代表者〉田中 宏和｜情報学部 教授

14．静岡大学は大きな自然公園 ～植物・野鳥・昆虫の観察会を通じての地域連携プロジェクト～ ―― 33
〈代表者〉宮澤 俊義｜技術部静岡分室 技術長

15．地域でつなぐ伊豆半島ジオパークと防災 ―― 35
〈代表者〉山本 隆太｜教職センター学術研究員

巻　頭　言

静岡大学地域連携応援プロジェクトについて

阿部 耕也 ｜ イノベーション社会連携推進機構 地域連携生涯学習部門長

静岡大学は、『自由啓発･未来創成』のビジョンを掲げ、「質の高い教育と創造的な研究を推進し、社会と連携し、ともに歩む存在感のある大学」を目指して、教育・研究・社会連携の三つを大きな使命としています。なかでも社会連携に関しては、「地域社会とともに歩み、社会が直面する諸問題に真剣に取り組み、文化と科学の発信基地として、社会に貢献する」ことを使命としており、大学改革の３類型についても、世界的な得意分野を伸ばしつつも地域社会に根を下ろそうという本学のミッションに基づき、地域のニーズに応える人材育成・研究を推進する方向を選択しました。「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）」にも採択され、他大学、自治体、企業と連携して県内就職率の向上、新たな産業の創出、地域活性化に取り組んでいきます。

平成 28 年度プロジェクト募集のポスター

社会連携の重要性に鑑み、平成 24 年度には地域連携と産学連携に携わる組織を統合し、イノベーション社会連携推進機構を設置しました。学内において、地域連携活動の窓口となる組織を設置する前から、すでに本学の学生・教職員はさまざまな地域連携活動に携わっていますが、それらの活動は必ずしも学内外の皆様には知られておらず、また活動に際していろいろな困難を抱えているのが実情です。そこで、平成 23 年度にイノベーション社会連携推進機構・地域連携生涯学習部門の前身である地域連携協働センターが、「地域連携応援プロジェクト」を企画し、「本学の学生・教職員が主体となり、地域の人々や団体、自治体等と協働で取り組んでいる又は新たに取り組もうとする地域活性化につながる活動」への支援を学内で公募、採択しました。初年度以降も継続して公募を行い、これまでの支援実績は下表のとおりです。6 年目を迎えた今年度は、学内外にもプロジェクトが認知され、25 件という応募があり、15 件を採択しました。各プロジェクトチームは、学外の方々と連携しながら着実な活動を展開し、有益な成果が得られており、その成果は学内外に高い評価を受けております。ここに平成 28 年度の成果をまとめて「地域連携応援プロジェクト成果報告書」を発行いたします。

平成 25 年度からは新たな展開として、本プロジェクトを手がかりに、これまで大学との接点がない地域から広く課題を公募する「地域課題解決支援プロジェクト」を立ち上げました。第 1 期の 27 課題、今年度公募された第 2 期の 14 課題の計 41 課題について、学内外の支援を得ながら新たな地域連携・貢献活動を展開中です。本成果報告書をご覧いただき、本学には学生･教職員の携わる多様な地域連携活動があることを知っていただき、今後それらの活動に加わったり、あるいは新たな地域連携活動を始めたりするきっかけとしていただければ有り難く存じます。

年度	応募	採択	学内他部局に付託（依頼先）	予算措置
H23	17 件	7 件	4 件（防災総合センター）	100 万円
H24	18 件	11 件	3 件（学生支援センター）	150 万円
H25	14 件	12 件	0 件	180 万円
H26	16 件	13 件	0 件	180 万円
H27	16 件	11 件	0 件	105 万円
H28	25 件	15 件	0 件	129 万円

1

鷲山恭彦家文書（掛川市）の調査・保存事業

橋本 誠一 ｜ 人文社会科学部教授

1．事業の目的

掛川市域（旧大東町）には貴重な古文書群（河井家文書、鷲山家文書、熊切家文書など）が存在する。しかし、その多くは、本格的な資料調査・保存作業がなされないまま、事実上放置された状態にある。掛川市大東図書館に保管されている河井家文書ですら、ボランティア（河井重蔵・弥八研究会）による調査が細々と行われている程度で、最終的な保存場所も確定していない。現在の状況がこのまま続けば、近隣の古文書群はいずれ朽ち果ててしまうおそれが強い。

そうした古文書群の一つが鷲山恭彦家文書である。そこでわれわれは、静岡県近代史研究会の協力を得ながら、同家文書の調査・保存作業を進めていきたいと考えている。

2．事業の対象

鷲山恭彦家（掛川市上土方 4 番地）の自宅土蔵（写真参照）に所蔵しておられる文書群。

鷲山恭彦家の土蔵（全景）

3．事業の内容と経過

原則として毎月第 4 週の日曜日を資料調査日に設定し、静岡県近代史研究会の会員その他の皆さんのご協力を得て、おもに資料の現状記録、目録取りの作業を行うこととした。これまでに実施した調査の概要は以下の通りである（一部、今後の予定も含む）。

・予備調査　2016 年 3 月 20 日（日）　鷲山家文書の現状を確認し、箱ごとに番号を付すとともに（ただし一部）、本調査の作業手順を確認した。参加者 13 名。

・第 1 回調査　4 月 23 日（土）、24 日（日）　番号を付した箱ごとに土蔵から作業場所に移し、順次、資料の現状記録（資料番号を付し、写真撮影を行う）と資料目録の作成（撮影済み資料を一点ごとに手書きで目録化）を行った。9 名参加。

資料の入った段ボール箱に付けられた箱番号

・第 2 回調査　5 月 29 日（日）　第 1 回調査の継続作業（現状記録と目録取り）を行った。

・「平成 28 年度 静岡大学地域連携応援プロジェクト」採択（87,000 円）　6 月 15 日

・第 3 回調査　6 月 26 日（日）　第 2 回調査の継続作業（現状記録と目録取り）を行った。

・第 4 回調査　7 月 24 日（日）　第 3 回調査の継続作業（現状記録と目録取り）を行った。本月から、「平成 28 年度 静岡大学地域連携応援プロジェクト」の配分金を用いて調査参加者に交通費の支給を開始した。参加者は橋本を入れて 9 名。うち交通費を支給した者 8 名。

・第 5 回調査　8 月 28 日（日）　第 4 回調査の継続作業（現状記録と目録どり）を行った。参加者は橋本を入れて 10 名。うち交通費支給者 9 名。なお、本月から目録取りの方法を、従来の紙媒体への手書きからデジタル目録シート（岡村作成）への PC 入力へと変更した。

・第 6 回調査　9 月 25 日（日）　第 5 回調査の継続作

業（現状記録と目録取り）を行った。なお、この日、中性紙封筒 3000 枚を鷲山家に搬入し、目録取りが終わった資料を中性紙封筒に封入する作業を開始した。
・第 7 回調査　10 月 23 日（日）　第 6 回調査の継続作業（現状記録と目録取り）を行った。なお、この日、中性紙の資料箱を鷲山家に搬入し、封入済み資料を箱に収める作業を開始した。参加者は橋本を含め 4 名。うち交通費支給者 3 名。

目録取り（手書き）の作業

・第 8 回調査　11 月 23 日（水・祝）　第 7 回調査の継続作業（現状記録と目録取り）を行った。参加者は橋本を含め 9 名。うち交通費支給者 8 名。本プロジェクトによる交通費の支給は本月で打ち切りとした。
・第 9 回調査　12 月 25 日（日）　第 8 回調査の継続作業（現状記録と目録取り）を行った。参加者 8 名。
・2017 年 1 月 22 日（日）第 10 回調査の調査日に予定していたが、橋本発病のため、予定をキャンセルした。
・第 10 回調査　2017 年 2 月 26 日（日）　第 9 回調査の継続作業を行った。ただし、今回は参加者数が 3 名と少なかったこともあり、現状記録は行わなかった。
・第 11 回調査　2017 年 3 月 26 日（日）に実施予定。

4. 調査の成果

これまでに現状記録と目録作成を終えた資料は、まだ鷲山家文書のほんの一部にすぎない。中性紙封筒に封入済みの資料は 2000 点以上、うちデジタル目録シートに入力済みの資料は約 900 点以上である（2 月 27 日現在）。

そのため、厖大な鷲山家文書の全体像を把握するには至っていない。今後の調査にかなりの長期間を要すると考えられる。

これまでのささやかな調査成果からも、以下のような資料群の存在を指摘することができる。
①遠州民会往復文書（明治 9 ～ 10 年）
②十小区役所往復文書（明治 7 ～ 11 年）
③函右日報（756 ～ 1275 号、明治 14 ～ 16 年、目録上の欠番あり）
④静岡新聞（432 ～ 443 号、明治 11 年）
現在の調査は、おもに②を対象に行われている。これらは量的にまとまって保存されている。そのなかには、鷲山家と同じ地域に住む地方名望家・熊切嘉一郎（掛川市中、現在別チームが調査中）の名前も登場し、地方名望家間の社会的連携の強さをうかがわせる。

整理番号	標題(内容)	●推1	●元号	●推2	●年	●年(単位)
①-1	日本博覧図		明治		35	年
①-2-1	受験研究　幾何のあたま		昭和		4	年
①-2-2	女学校用　算術新教科書上巻		大正		4	年
①-2-3	女学校用　算術新教科書中巻		大正		4	年
①-2-4	女学校用　算術新教科書下巻		大正		4	年
①-2-5	NEW　ALGEBRA		大正		13	年
①-2-6	NEW　ALGEBRA		大正		13	年
①-2-7	NEW　PLANE　GEOMETRY		大正		12	年
①-2-8	三角法学ビ方ト解キ方		大正		5	年
①-2-9	系統的分類　高等学校入学試験　代数幾何問題集		昭和		4	年
①-2-10	受験研究　代数のあたま		昭和		4	年
①-2-11	携帯用CARD代数学チャート					
①-2-12	訂正五版　金利精覧		大正		4	年
①-2-13	高等諸学校最近傾向数学入試問題新研究		昭和		4	年
①-2-14	カード式　新参考書　英文法		大正		10	年
①-2-15	筆算題叢答式　六					
①-2-16	筆算題叢答式　七					
①-2-17	筆算題叢　五		明治		18	年
①-2-18	筆算題叢　七		明治		8	年
①-2-19	筆算題叢　六		明治		8	年

デジタル目録シート

2

静岡県内の高校教員と連携した地歴教員養成・支援プロジェクト「地歴教員養成講座」

藤井 真生 ｜ 人文社会科学部教授
岩井　淳 ｜ 人文社会科学部教授
杉田　望 ｜ 大学院人文社会科学研究科２年

１．本プログラムについて

近年、教育現場では「アクティヴ・ラーニングの実施」に代表されるように、以前にもまして授業方法の工夫が求められるようになっている。一方、現場の教員たちは授業準備以外の業務も多く、最新の研究成果のフォローや、新しい授業実践の学びになかなか時間を割くことができないでいる、という。静岡大学人文社会科学部の歴史学コースでは、以前から高大接続の場として「静岡歴史教育研究会」を立ち上げて、高校教諭との交流をはかってきたが、その活動の中で以上のような声がしばしば大学教員に寄せられた。これを受けて歴史学コースでは、2014 年度より、「静岡歴史教育研究会」から派生する形で「地歴教員養成講座」を発足させた。実施主体はコース所属教員７名（運営を中心的に担当しているのが藤井、岩井および大学院生の杉田）と、静岡県歴史教師塾の会の高校教諭２名（浜松西高校教諭の松井秀明、静岡市立高校教諭の水野彰紀、2015 年度より藤枝東高校教諭の牧野一高が参加）で、本学が静岡県中部にあるという利点をいかし、全県的な高校教諭の授業研究の場として、また若手講師･教員志望学生（大学院生）の研修の場として、県内の高校における社会科教育力の向上に資することを目指して活動している。今年度で３年目となる。

ICT を用いた授業の実践報告（第２回）

２．今年度の実施概要

今年度は年 10 回、計 17 報告を実施した。以下に今年度のプログラムを掲載する。

【第 1 回】2016 年 5 月 28 日（土）
･「東アジアのなかの平安文化」
貴田潔（静岡大学人文社会科学部准教授）
･「思考ツールでまとめるイギリス産業革命」
牧野一高（藤枝東高校教諭）
【第 2 回】2016 年 7 月 2 日（土）
･「ICT を使ったアクティブラーニング～世界史を題材とした CM 作成～」
吉川牧人（掛川西高校教諭）
【第 3 回】2016 年 7 月 23 日（土）
･「大義なき災禍――弱者からみた文化大革命」
　山本達也（静岡大学人文社会科学部准教授）
･「久能山東照宮と明治維新」
　今村直樹（静岡大学人文社会科学部准教授）
【第 4 回】2016 年 8 月 6 日（土）
･「日ロ戦争をどう教えるか～教材研究の楽しみ～」
　松井秀明（浜松西高校教諭）
【第 5 回】2016 年 9 月 24 日（土）
･「主権者教育と法教育――法教育の理論と実践」
　横濱竜也（静岡大学人文社会科学部准教授）
･「『総合的な学習の時間』の取り組み～ディベートを中心に～」
　北村啓（富士市立高校教諭）
【第 6 回】2016 年 10 月 22 日（土）
･「開国と幕府の動乱」
　浅島慎（静岡大学教育学部 4 年）
･「ゲルマン人の大移動とフランク王国」
　小林実央（静岡大学人文社会科学部 4 年）
【第 7 回】2016 年 11 月 26 日（土）
･「執権政治の確立――御成敗式目から読み解く武家社会」
　佐藤昌史（秀明大学学校教師学部 4 年）
･「「地理総合」での地球的諸課題の扱い方」
　山本隆太（静岡大学教職センター学術研究員）

【第 8 回】2016 年 12 月 10 日（土）
・「ナチスドイツとファシズムの台頭」
　佐藤朝子（横須賀高校講師）
【第 9 回】2017 年 1 月 28 日（土）
・「歴史の記述と価値判断」
　堂囿俊彦（静岡大学人文社会科学部准教授）
・「鎌倉時代の浄土教」
　斎藤真希（静岡大学人文社会科学部講師）
【第 10 回】2016 年 2 月 11 日（土）
・「アメリカ南北戦争～知識構成型ジグソー法による授業実践～」
　水野彰紀（静岡市立高校教諭）
・「西ヨーロッパ中世世界の変容（十字軍運動）」
　平野静香（磐田南高校教諭）
以上の 10 回の講座を開催した（会場はすべて静岡大学人文 B 棟 302）。

各高校の総合学習への取り組み方を知る（第 5 回）

今年度のプログラムの特色を以下にあげる。
①世界史の公開授業に特徴的であったが、アクティヴ・ラーニングの実践報告が多くなされたこと（第 1 回、第 2 回、第 10 回）。
②高校地歴で採用された教員は必ずしも歴史の授業のみを担当するわけではない、という実情をふまえ、地理の講義、公民系の講義、総合学習の実践報告が実施されたこと（第 5 回、第 7 回、第 9 回）。
いずれも参加した高校教員・教員志望学生（大学院生）の関心が高く、非常に有益な試みであったといえる。

一方、高校の授業すべてにおいてアクティヴ・ラーニングが求められるわけではないため、オーソドックスでありながら精選された教材研究の伝授（第 4 回）や、受験対策を念頭に入れた実践報告（第 10 回）も実施し、求められる学習目標が多様な高校の現状に配慮する形にした。また、歴史学を専門とする大学教員だけではなく、文化人類学（第 3 回）、法学（第 5 回）、地理教育（第 7 回）、倫理学（第 9 回）、仏教史（第 9 回）の研究者を招くことで、講座での学びに広がりをもたせることができた。

高校教諭たちの前で模擬授業を展開する（第 6 回）

3．今年度の成果

合計 10 回の講座の参加者は延べ 201 名にのぼり、そのうち高校教員が 71 名であった。新規の参加者は 41 名であり、教員を志望する高校生の参加もみられた。

静岡周辺だけではなく、県全体の高校教員の学びの場となることが本プログラムの目的であるが、今年度の新規参加高校教員の勤務地をみてみると、藤枝市、磐田市、富士宮市、静岡市、浜松市（天竜区）、島田市、焼津市となっており、県西部・東部からの参加もみられる。また、愛知県名古屋市、三重県度会郡といった県外からの参加もあり、広く高校教諭の活発な交流を促すという目的は達成されたといえる。なお、教員志望者に関しても、静岡大学の学生や大学院生に限定されるものではなく、常葉大学、愛知大学、秀明大学（千葉）などから駆け付けた者もいた。西部・東部の高校教員に公開授業を依頼したことが、口コミなどでの情報拡散につながったのだといえよう。

県内の高校における社会科教育力の向上に関しては、目に見える形で成果を報告することはできない。ただし、本講座に参加していた教員志望学生・大学院生および講師 3 名が、今年度の静岡県教員採用試験に合格した。本プログラムで学んだ成果を、彼らが新しくたつ教壇で実践していってくれるものと期待できる。

俯瞰的に空間を把握しながらの世界史授業（第 10 回）

3

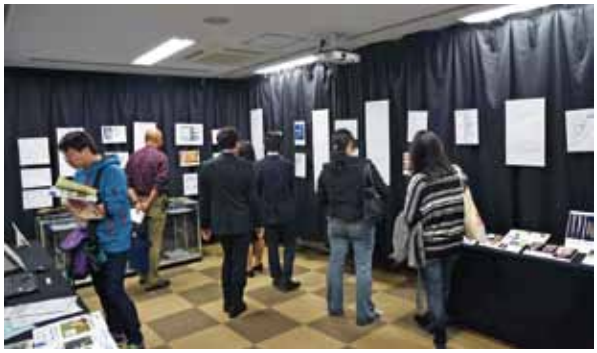
愛鷹山麓出土の旧石器資料に関する展示コンテンツの開発

山岡 拓也 ｜ 人文社会科学部准教授

ホモ・サピエンス（我々と同じ現生人類）はおよそ 20 万年前のアフリカに出現し、5 万年前以降にユーラシア大陸やオーストラリアに拡散した。ホモ・サピエンスがどのように進化したのかは自然人類学や遺伝人類学の分野で研究され、ホモ・サピエンスの行動がどのように変化したのかは考古学の分野で研究されている。こうした研究成果について、近年、NHK の特集番組などで紹介されるようになり、一般市民からも注目されるようになってきた。

静岡県東部愛鷹（あしたか）山麓は国内有数の旧石器時代の研究フィールドである。とりわけ、日本列島におけるホモ・サピエンス出現期である 4 ～ 3 万年前の遺跡資料について重要な発見がなされてきた。およそ 3.8 万年前の神津島産の黒曜石の利用（海上渡航の証拠）やおよそ 3.3 万年前の落とし穴の利用（世界最古の罠猟の証拠）などが知られている。これらは世界的にみても重要な発見であり、日本国内だけでなく、世界中の研究者からも注目を集めている。しかし、そうした学術的な成果は、静岡県内の市民にはほとんど知られていないのが現状である。

本事業の代表者は、これまで愛鷹山麓の旧石器時代から出土した台形様石器の研究を行ってきた。台形様石器は日本列島に最初に定着したホモ・サピエンスが使用していた石器である。代表者は沼津市土手上遺跡で出土した台形様石器の形態分析を行うとともに、台形様石器の複製を用いた投射・刺突実験を実施し、台形様石器は遠隔射撃を行う狩猟具の先端具として用いられていたことや、その狩猟具は先端部への衝撃を和らげるクッションを備えた構造であることなどを明らかにしてきた。



第 44 回考古展の様子（1）

こうした研究に取り組んでいることから、静岡大学考古学研究室が中心となり、沼津市教育委員会（沼津市文化財センター）とふじのくに地球環境史ミュージアムと連携し、愛鷹山麓の旧石器時代資料の展示コンテンツを開発し､その展示を各機関で実施することで、静岡県内の市民にこれまでの愛鷹山麓での研究成果を紹介するという本事業を企画した。こうした取り組みを通して、地域の教育･研究機関の協力関係を模索し、地域の文化資源の活用を促進することも本事業の目的であった。

静岡大学人文社会科学部社会学科歴史学コースの考古学分野（考古学研究室）では、例年、学部 3 年生が履修する考古学実習Ⅲ（あるいは考古学実習Ⅱ）を通して、考古資料の展示の企画・準備を行っており、毎年 11 月に開催される静大祭で、その成果を披露している。この静大祭での展示（考古展）は今年度で 44 回目を迎え、毎年内容を変えて、発掘調査や測量調査の成果や教員の研究成果などを紹介してきた。学芸員資格の取得を希望する考古学専攻の学生にとって、考古資料の展示に関わる経験を積む機会となっている。本事業では、こうした考古学研究室での教育活動と、地域の博物館や教育委員会での資料展示を結び付けて計画した。本事業を実施するに当たっては、沼津市教育委員会主事の小崎晋氏とふじのくに地球環境史ミュージアムの主任研究員の日下宗一郎氏にご協力いただいた。

展示の企画・準備は、考古学実習Ⅲの授業時間を利用して 7 月から開始し、9 月には沼津市教育委員会の小崎氏とふじのくに地球環境史ミュージアムの日下氏と展示内容に関する打ちあわせを行った。10 月以降に、考古学実習Ⅲの時間やその他の時間も使って、本格的に展示準備を行った。静大祭期間中の 11 月 19 日と 20 日に、第 6 回キャンパスフェスタ in 静岡の一企画として、「第 44 回考古展　沼津市土手上遺跡から出土した 3 万 5 千年前の狩猟具」を開催した。考古展は、毎年、日本史研究室の古文書展と一緒に開催しているが、今年度は、2 日間で考古展と古文書展を合わせて 200 人を越える方々に見学していただいた。

第 44 回考古展の様子（2）

ふじのくに地球環境史ミュージアムのホットトピックギャラリーでの展示の様子（1）

第 44 回考古展では、①世界各地で進められているホモ・サピエンスの出現と拡散に関する研究の概要、②愛鷹・箱根山麓の旧石器時代研究の概要、③台形様石器の形態研究と実験考古学による研究成果とその意義、の項目に分けて展示を制作した。③では、沼津市教育委員会より台形様石器を借用し実物を展示するとともに、これまで代表者が実施してきた投射・刺突実験の実験資料や実験器具を展示した。また、投射・刺突実験時に撮影した動画も映写した。2 日間の展示では、考古学実習Ⅲを履修している学部 3 年生 4 名が展示解説を行った。展示の内容をまとめたパンフレットも作成し、来場者に配布した。第 44 回考古展を小崎氏と日下氏にも見学していただき、それぞれの機関で開催する展示に関する打ち合わせを行った。

第 44 回考古展パンフレット表紙

2017 年 2 月 21 日から 3 月 5 日まで、ふじのくに地球環境史ミュージアムのホットトピックギャラリーで、「3 万 5 千年前の狩猟具―静岡県沼津市土手上遺跡から出土した台形様石器の研究―」を開催させていただいた。最終日の 3 月 5 日には、学生とともに展示解説を行った。この展示は、第 44 回考古展の内容のダイジェスト版として制作した。また、沼津市文化財センターでは、春休み期間中、土日も資料展示室が開放される予定であり、3 月 20 日から 4 月 2 日まで、ふじのくに地球環境史ミュージアムと同じタイトルと内容の展示を開催させていただき、3 月 20 日には学生とともに展示解説を行う予定である。

第 44 回考古展では、見学に来ていただいた方々にご協力いただき、アンケートを実施した。当日の様子やアンケートをみるかぎり、展示を制作した学生による解説もあり、多くの方々に、世界各地での研究成果や愛鷹山麓での調査研究に興味をもっていただけたようであった。また、実験考古学は、一般的にあまりなじみのない研究分野であるようで、投射・刺突実験の動画や写真を用いることで、多くの方々が実験考古学という考古学の研究手法を初めて知る機会となったようである。ただし、アンケートでは、展示の内容が専門的で難しかった、という感想がいくつかあり、専門的な内容や最新の研究成果を盛り込みつつ、よりわかりやすい展示を制作することが課題であると認識された。

いくつかの課題はあるが、世界で進められている研究の中に、愛鷹山麓の遺跡資料の研究成果を位置づけて紹介する展示を制作し、静岡県内の他の教育・研究機関で展示を開催していただくということは、初めての試みであり、それらを実現できたことで、静岡県の市民に研究成果を紹介するとともに、地域の教育・研究機関と連携して地域の文化資源の活用を促進するという当初の目的は達成できたように思われる。今後もこうした地域の文化資源の活用と地域連携の取り組みを継続していきたい。

ふじのくに地球環境史ミュージアムのホットトピックギャラリーでの展示の様子（2）

4

大学と保護者と親の会の連携による発達障害児への学習等支援活動「きんもくせい土曜教室」

大塚　玲 ｜ 教育学部教授
黒柳 有菜 ｜ 教育学部特別支援教育専攻４年
高橋 美波 ｜ 教育学部特別支援教育専攻４年
仲谷 知美 ｜ 教育学部特別支援教育専攻４年

１．活動の目的

「きんもくせい土曜教室」は、「静岡県ＬＤ等発達障がい児・者親の会きんもくせい」、発達障害のある小学生の保護者、教育学部教員（大塚）と学生ボランティア（特別支援教育専攻学生）が連携して実施している発達障害児への学習等支援活動です。この活動は、平成 11 年に開始し、今年度で 18 年目を迎えました。

「きんもくせい土曜教室」は、以下の３つの目的のもとに活動しています。

①発達障害のある小学生に対して個別の学習指導と小集団でのソーシャルスキルを学ぶ場を提供すると共に、子どもたち同士の交流を図る。

②特別支援教育を学ぶ学生に対して臨床的指導及び実践的研究の機会を提供し、専門知識と実践的技能を有する専門家の養成に貢献する。

③発達障害のある子どもをもつ保護者同士の交流の場を提供し、専門家とのネットワークを広げ、こうした子どもたちの理解や支援の輪を広げる。

２．活動の概要

本年度の参加者は、発達障害のある小学生 13 名（6 年生 4 名、5 年生 4 名、4 年生 3 名、3 年生 2 名）とその保護者 13 名、学生ボランティア 20 名（教育学部 4 年生 7 名、3 年生 5 名、2 年生 5 名、1 年生 3 名）、スーパーバイザー 4 名（研究室の卒業生で、特別支援学校教員 4 名）、そして運営責任者の大学教員（大塚）です。

学習の様子

小集団活動（フラフープ送り）の様子

活動内容は、毎月 2 回、土曜日の午前中に行われる、個別の学習指導と小集団活動です。今年度の活動は、平成 28 年 4 月 23 日（土）～平成 28 年 2 月 11 日（土）の間に計 16 回行いました。通常の活動に加え、クリスマス会など一年に 3 回お楽しみイベントも行いました。

３．個別の学習支援

個別の学習支援では、子ども 1 名につき学生 1 または 2 名が学習指導を行います。学生は子どものペースや、認知特性に応じて教材を作り、一人ひとりにあった学習を行えるよう努力しています。以下にその一例を紹介します。

漢字を正確に書くことが苦手なＡさんに対して行った指導では、視覚認知機能の向上を図るためのビジョントレーニングドリルに加え、１回の指導で、①漢字を部品ごとに色分けした手本を見て、とめ、はね、はらいなどの構成要素を確認する。②なぞり書きで形や位置関係を確認する。③十字リーダーありのマスで 2 回、なしのマスで 2 回書く。（①から③を 5 文字書く）④全ての漢字を書き取りし終わった後、指導者と振り返りをしながら、自己フィードバックを行う、ということを行いました。この指導により、A さんの視覚認知機能に向上がみられ、漢字をより丁寧に書くことができるようになりました。

また、今年度は昨年度に引き続き、iPad を使用し

iPad を使用して漢字を学習している様子

た学習にも取り組みました。書字が苦手なＢさんに対して、漢字やひらがなのアプリを使用したことで、意欲的に学習に取り組むことができました。学習だけで使うのではなく、姿勢を録画して見せることで姿勢に気をつけるよう促したり、活動中の子どもたちの様子を写真に収めて記録したりすることにも活用できるようになりました。

４．小集団活動

小集団活動は、学年や男女構成、行動や認知の特徴等を考慮し､5･6 年生６名と 3･4･6 年生７名の２グループに分けて実施しました。

小集団活動では、友達と協力することが必要とされるゲームを行います。その中で、他人と関わることの楽しさを経験してもらいたいと考えています。そのうえで、話の聴き方や、意見の伝え方、話し合いの仕方といったソーシャルスキルやコミュニケーションスキルを身につけるための活動を行います。

この小集団活動で子どもたちが楽しく友達や学生と関わることができるように、子どもたち一人ひとりに合った目標の設定や支援を行ってきました。例えば、活動中に気に入らないことがあると集団に入れなくなってしまうことがあるＣさんには､「小集団活動の約束」を作成して小集団活動の前に確認をしていました。また、ゲームの中には話し合い活動を含むものが多く、どうしたらゲームに勝てるか考えながら、友達の考えを聞いたり自分の意見を友達に伝えたりすることに重きをおいてきました。活動の最後には「振り返りシート」を活用して今日の活動でどんなことを頑張ったか、次はどんなことを頑張りたいかペアの学生と話す時間を設けました。こういった活動を通して、ゲーム中にも友達を大きな声で応援するなど子どもたち同士が関わっている様子がたくさん見られました。

表１　小集団活動の内容

第１回	自己紹介 リズムネーム	第9回	じゃんけん列車 缶つみリレー
第２回	ぼく・わたしクイズ そろそろリレー	第10回	絵伝えゲーム なんでもバスケット
第３回	フルーツバスケット みんなでリレー	第11回	おちたおちた お玉スプーンリレー
第４回	プリンをねらえ ボールわたし	第12回	言葉の郵便屋さん 忍者ゲーム
第５回	ミックスボイス フラフープ送り	第13回	協力トライアングル クリスマスツリーを作ろう
第６回	後出しじゃんけん うちわサッカー	第14回	ペアでジェスチャー みんなでそろえよう
第７回	猛獣狩りに行こうよ スリッパリレー	第15回	お別れ会の出し物を決めよう！
第８回	キーワードビンゴ だるまさんが拾った	第16回	お別れ会の練習をしよう！

５．本活動の成果と課題

今年度は、iPad を使用したことにより、例年以上に充実した活動を行うことができました。

子どもの認知特性に応じた学習指導の成果から、ノートのマスから文字をはみ出さないで書けるようになったり、学習の時間が終わっても文字の練習をするなどの姿も見られました。

小集団活動では、学校ではうまく集団の中に入れない子どもたちが、ここでは普段とは違った生き生きとした姿をみせてくれました。この活動は、本来の自分をだしても許される安心の場所となっているのです。保護者にとっては、個別の学習支援・ソーシャルスキルトレーニングを受けられることや、専門家に相談ができることはもちろん、同じ悩みをもつ保護者の交流の場となっています。

学生にとっては、学習支援における問題の作成や指導、小集団活動の計画や進行など、普段の大学生活や実習では得られない貴重な体験ができる場となりました。

5

富士市の小学校教諭と協働する造形ワークショッププロジェクト

川原﨑 知洋 ｜ 教育学部准教授

1．はじめに

現在、図画工作科の授業時間数は削減傾向にあります。これに加え、予算や場所の制約などの諸問題が絡み合い、子どもたちが満足できる活動を提供することが難しい状況にあると言えます。子どもたちが心と体を開放し、造形活動に浸ることのできる時間の提供が求められているのではないでしょうか。

大学と地域の施設や人々と連携・協働し、学校や家庭では味わえないような記憶に残る造形体験を提供することが今回のプロジェクトの大きな目的です。若手教諭や学生の発想力や行動力と、ベテラン教諭の知見を活かしながら造形活動のプログラムを開発・実施していくことで、子どもたちがその場所や時間に浸るよう造形体験を提供できると考えました。

今回は富士芸術村で富士市内の小学校教諭と連携し「紙とあそぼう　50 のマジック - 紙プロジェクト -」を企画・実施しました。このプロジェクトの内容と成果についてそれぞれ報告していきたいと思います。

2．富士芸術村「ぼくも私もアートする」の概要

富士芸術村では 8 月の上旬に小学生を対象とした「ぼくも私もアートする」というアートイベントを開催しています。この施設は古民家の屋内展示スペースと、日本庭園の屋外イベントスペースを持ち、定期的に企画展や造形プログラムを実施しています。アートイベントには公募により、富士市内の小学生 40 名が集められました。富士市内の小学校教諭と美術・デザインを学ぶ学生 5 名が協働し、企画・運営者として参加しました。

今年度は富士市の市制 50 周年という節目でもあり、富士市を代表する産業である紙や紙製品をテーマにした造形活動を考えることになり、5 月末から学内で検討を開始しました。

⑴　紙を用いた素材実験 ＜ 5 月末＞

どのような紙をどのように扱うのかについて検討することから始めました。段ボール、新聞紙、半紙、模造紙、ケント紙、クラフト紙、画用紙、トイレットペーパーなど、あらゆる紙製品を試しました。

造形プログラム全体会議

⑵　造形プログラム全体会議　＜ 6 月 17 日（土）＞

富士市内の小学校教諭と静岡大学の学生が集まり、当日行う造形プログラムの内容について検討を行いました。若手教諭や大学生らしい柔軟な視点と、ベテラン教諭の知識・技能とがクロスしながら、有意義な話し合いが行われました。それぞれの小学校教諭からはこれまで行ってきた授業実践や題材の紹介が行われ、学生からは今回の造形イベントで行ってみたい題材のプレゼンを行い、具体的な造形プログラムについての検討が行われました。若手の小学校教諭にとっても、これから教諭を目指そうとする大学生にとっても、教材開発の新たな視点の獲得という点で、全体会議の意義は大きいものだと考えます。

3．紙プロジェクト　＜ 8 月 6 日（土）-7 日（日）＞

参加した富士市内の 40 名の子どもたちを前に、ファシリテーターである教諭と学生がアイスブレイクの意味も込めた導入劇を行い、紙の造形の世界観を演出しました。その後、1 日のスケジュールが説明され、造形プログラムがスタートしました。

⑴　紙管の基地作り

紙管は富士市の工場で生産されており、カットされる前の状態で 2 メートルほどの長さがあります。この紙管を 3 本ずつ組合せ、子どもたちが造形していく基地のベースを用意しました。あくまでも子どもが創作する際のきっかけとしての造形であり、事前に作り込まないように注意しました。

子どもたちはこの紙管ベースをきっかけに、用意された段ボール、新聞紙、模造紙、カラーテープ、シュロ縄などを自由に用いて、思い思いの基地を作っていきました。一つの紙管にこだわりを持って黙々と造形する様子、紙管同士をつなげて徐々に増殖していく様子、紙管から離れて段ボールのみで迷路のような造形を作りだす様子、古民家の庭の石や木などの屋外環境をうまく利用して基地を作る様子など、子どもたちの表現は実に多様性に富んでいました。

(1) 紙管の基地作り

(2) 紙のプール

ベニア板で囲ったプールの中に大量の新聞紙を投入し、集まってきた子どもたちと一緒に新聞紙を細長くちぎり、紙のプールを作っていきました。体全身に新聞紙をまといながら、ひたむきに素材と遊ぶ姿が見られました。子どもたち同士が関与し合うことで、自然と次々に新しい遊び方が生まれて来る様子が印象的でした。また、ベテラン教諭は子どもたちの様子を確認しながら、新たな活動を引き出すために、子どもたちにさりげなく働きかけている様子も見受けられました。

(2) 紙のプール

(3) トイレットペーパーでアクションペインティング

(3) トイレットペーパーでアクションペインティング

トイレットペーパーを細かくちぎり、水と絵の具を少しずつ加えながら混ぜることで、粗いペースト状の描画材ができました。子どもたちはこの描画材をひと摑みし、ベニアのキャンバスに思い切り投げつけました。ダイナミックなアクションペインティングとなりました。

4. まとめ

時間を気にせずに活動できること、自分の身体よりも大きな素材を扱うことができること、多彩な環境が用意されていること、多くの大人のスタッフがファシリテーターとして関わることができることなどが、本イベントの特徴であり、醍醐味だと思います。

学校現場の中で出来る範囲内での教材開発に留まることなく、本当に楽しい造形活動は何かという根本的なところから考えることができ、学生スタッフにとっても貴重な経験だったと思います。大学生の発想力や行動力を活かしながら造形活動のプログラムを開発し、心と体を解放できる体験を多くの子どもたちに提供できたと思います。

6

子どものレジリエンス（精神的回復力）を育てる「富士山モデル」の実践

小林 朋子 ｜ 教育学部教授
辰巳 翔也 ｜ 静岡大学教育学研究科２年
宮内 昌子 ｜ 静岡大学教育学部教育心理学専修　４年
山西　舞 ｜ 静岡大学教育学部教育心理学専修　４年
池ヶ谷　美紀 ｜ 静岡大学教育学部教育心理学専修　４年
宮島 空見 ｜ 静岡大学教育学部教育心理学専修　３年
山本　勘太郎 ｜ 静岡大学教育学部教育心理学専修　３年

災害やいじめなど様々な危機的な状況におかれても精神的健康を維持できる力，および傷ついても回復できる力を養っておくことが求められてきている。このニーズに応えるように、近年注目されている心理学的概念として「レジリエンス（resilience）」がある。

レジリエンスは「ストレスフルな出来事を経験したり，困難な状況にさらされていても精神的健康や適応行動を維持する，あるいはネガティブな心理状態に陥ったり心的外傷を受けたりしても回復する能力や心理的特性」（石毛・無藤 ,2005；小塩ら ,2002）といった定義がなされている。小林ら（2017）は、これまでのレジリエンスの先行研究をふまえた上で、レジリエンスを「心」「技」「体」で分け､それぞれからアプローチすることによってレジリエンスを高める包括モデル（通称､「富士山モデル」）を提案している。

本プロジェクトの連携先の学校では、このレジリエンスを育てる「富士山モデル」に基づいて様々な学校教育活動を進めている。本報告では、連携先の学校で行っている実践のうち、大学研究者と学生が入り、学校と大学が協働して行った実践活動を紹介する。

小学校での実践　＜保護者・教職員向けの講話＞

目的：家庭や学校において子どものレジリエンスをどのように育てるとよいかについて講話を行った。また「体」に関連するリラックス法の体験も行った。

日時：平成 28 年 9 月

場所：A 小学校

対象者：保護者 40 名・教職員名 26 名　計 66 名

参加者の感想

保護者

・初めて聞いた言葉でしたが、大人にも子供にも共通して必要な力だと感じました。

・レジリエンス力、これから成長していくうえで、とても大事なことだと思いました。

・体・心・人付き合い「レジリエンス」はじめて聞く言葉でした。

・レジリエンス－初めて聞く言葉でしたが、これからは意識して、息子娘の軸となるものを育てていきたいと思いました。何かあった時でも前を向いて歩いていけるように。

・レジリエンスという言葉をはじめて聞きました。「精神的回復力」「立ち直り力」生きていく上でとても大切だと思います。子供がうまく身につけていけたらいいなと思います。

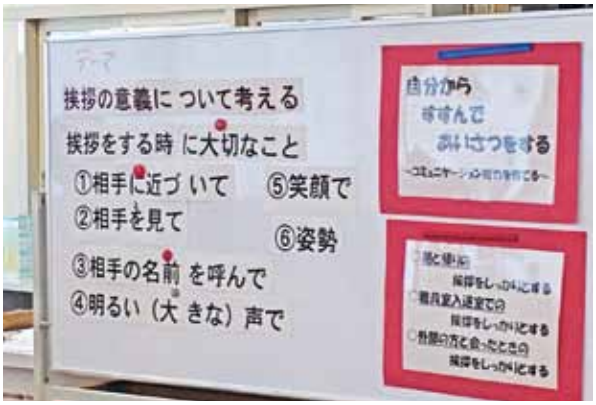
・レジリエンス、とても大事なことですね。

教職員

・これから（これまでも）のストレスフルな世の中を生きていくためには、どのようにストレスを折り合いをつけていくか、また、受けたストレスからどう立ち直るかが大切なことをあらためてわかってよかったです。

・自分もレジリエンスな生き方をしていきたいです。

・とても良い内容なので、子どもたち対象に行いたいと思った。実践を是非してみたいと保護者も意欲的であった。



中学校での実践＜中学生を対象とした講話＞
目的：「体」に着目した実践としてストレスマネジメントに関する講話を行った。
日時：平成 28 年 6 月
場所：B 中学校
対象者：B 中学校・C 中学校（B 中学校と同じ町内）
全生徒　110 名
内容：
「心と体の健康について考えよう！　ストレスと向き合うって？？」をテーマにして、ストレスのもとについて、ストレスに普段どのように対処しているかをふりかえった。そのうえで、ふだんの生活の中で取り入れられる呼吸法やリラックス法の演習を行い、日常生活でストレスを感じたときに対処できる方法を身につけられるようにした。
生徒の感想
・リラックスの仕方を詳しく知れてよかったです。私は緊張してしまうことが多いので、教えてもらったことを受験や中体連の時にやりたいと思います（３年生女子）
・ストレスがたまると、心がしぼんだり、イガイガすることが分かりました。ストレスがたまった時は、肩の力や深呼吸をするといいことが分かった（２年男子）
・心を大切にします。そのためには、普段の行動からリラックスしていきたいです（１年男子）

高校での実践＜高校生を対象とした授業＞
目的：「技」に着目した実践としてソーシャルスキル教育を行った。
日時：平成 28 年 9 月　計 4 回の授業
場所：静岡県立 D 高校
対象者：静岡県立 D 高校　1 年生 40 名、2 年生 39 名
内容：
「挨拶」「顔の見えないコミュニケーション」「ポジティブに考えよう」「ポジティブな感情に気づこう」などのスキルをテーマとして扱った。学生は、授業の中で悪い見本やよい見本などを見せる役を演じたり、生徒のロールプレイへの支援を行った。

まとめ

連携先の学校の小、中、高校生がコミュニケーションおよびストレスマネジメントのスキルを身につける機会を提供し、レジリエンスを高めることができた。さらに高校生は、授業後に大学生から大学生活や進路決定についての話を直接聞き、大学進学への意欲も高めることができた。また、保護者および教職員にとっても子どものレジリエンスを高める方法について理解を深めることできた。次年度以降も、引き続き静岡県内の小学校、中学校、高校に活動の場を広げていく予定である。

7

静岡赤十字病院小児科外来における壁面制作プロジェクト

髙橋 智子 ｜ 教育学部准教授

１．活動の目的

近年、病院では治療内容の充実と共に治療・療養環境の整備などの充実が一層求められています。ハード面やソフト面からの医療の充実は、市民のＱＯＬ向上に大きな役割を果たすと考えられ、小児科の外来や病棟では、子どもの不安や痛みなどを軽減するための治療・療養環境の改善に関する取り組みが各地で報告されています。地域における小児医療の充実は、安心して子育てができる地域社会の構築に関わる重要な課題であるといえます。少子化が課題となっている現代において、地域でのこうした医療の充実が、子どもが健やかに育つことができる社会の実現ひいては市民のＱＯＬ向上に大きな役割を果たすと考えられます。

本事業では、静岡赤十字病院との連携により、子どもや保護者が安心して治療を受けることのできる病院（小児科外来）の治療・療育環境の改善及び整備を目指しました。子どもや保護者の治療への心的負担を軽減すると共に、病院内の医療スタッフ（医師、看護師、保育士）の医療環境への悩みも加味しつつ、市民が利用しやすい病院の治療・療養環境の整備に取り組みました。

学生による医師と看護師への聞き取り調査の様子

２．活動の内容及び計画

本プロジェクトでは、静岡赤十字病院小児科外来の壁面制作に取り組みました。手順は、以下の①～⑥の通りです。

①先行研究の分析及び他施設の視察
②静岡赤十字病院への視察及び聞き取り調査
③壁面デザイン検討
④壁面デザイン（３案）のプレゼンテーション
⑤壁面デザイン決定
⑥壁面制作（下描き及び彩色）

本事業前に、他施設の視察（筑波大学附属病院、あいち小児保健医療総合センターなど）や学生による病院内の実態視察、医師や看護師、保育士への要望などの聞き取り調査を行い、壁面デザインの検討を重ねていたため（①②③）、本事業では、引き続き、病院側への壁面アイデア（３案）のプレゼンテーションと小児科外来の壁面制作（下描き及び彩色）に取り組みました（④⑤⑥）。

３．活動組織

活動組織は、静岡赤十字病院小児科の医師と看護師、保育士と大学教員１名（髙橋：責任者）、静岡大学教育学部美術教育専修及び美術・デザイン専攻の学生有志、地域創造学環アート＆マネジメントコースの学生有志により構成されました。学生組織は、企画部（４名）と制作部（約 20 名）により構成されています。企画部は壁面デザインの検討・提案及びプレゼンテーションを担当し、制作部は壁面の下描き及び彩色を担当しました。企画部のメンバーは、制作部にも参加しています。

４．壁面デザイン案のプレゼンテーション

平成 28 年８月８日（月）、静岡赤十字病院にて、企画部のメンバーによる壁面デザイン案のプレゼンテーションを院長及び副院長、看護部長などに対して行いました。原案として、３案（企画名:「あったかるーむ」「おくすりけんきゅうじょ」「げんきのもり」）を提案しました。プレゼンテーションでは、壁画制作の目的、現状分析、課題、効果などを伝えると共に、デザイン案のコンセプトや問題意識、デザインのポイントなどについて説明を行いました。その後、患者さんや病院関係者へのヒアリングを経て、壁面デザインが決定（９月）されました。デザイン決定時には、医師、看護師、保育士より、各デザインについて講評をいただいた上

プレゼンテーション資料：採用デザイン案（一部）

大学での下描き（模造紙）の様子

壁面デザイン案の決定時の様子（右：病院スタッフ、左：企画部メンバー４名）

小児科外来での下描き（壁面）の様子

で、最終決定したデザインが発表されました。

5. 壁面デザインの下描き

壁画デザインの決定後、再度、企画部によるデザインの修正及び色彩の調整など（10 ～ 12 月）を行いました。その後、企画部のメンバーによる制作部のメンバーへの制作説明会を開催し（１月）、プロジェクトの目的やこれまでの過程、企画部の思いなどを伝える場を設けました。さらに、今後の制作計画や企画部が作成した下描き用の資料説明なども行いました。その後、制作部による下描きに取りかかりました。

6. 壁面デザインの彩色

下描きの後、小児科外来での彩色に取りかかりました。デザインの色彩や安全性などを考慮して、絵の具を選定しました。制作部による彩色は、平日（16 時 30 分以降）と土日に行い、現在も進行中です。完成予定は、3 月末となっています。作業中には、病院関係者に声をかけていただき、コンセプトを聞かれたり、感想を話していただいたり、その過程で人との交流も生まれています。

企画部メンバーによる制作部メンバーへの説明の様子

7. まとめ

完成は３月末の予定ですが、現段階で病院関係者からは、「元々暗かった待合室が明るい雰囲気になり、扉を開けるのが楽しみになった」や「子どもが喜ぶデザインになっているので、ぜひ頑張ってほしい」などの声をいただいています。また、日赤病院のコンセプトである「地域に根づき市民から愛される病院」の視点からも、地元の大学生が壁面デザインの提案から制作まで関わる意義や価値についても、話題にあがっています。本プロジェクトでの取り組みは、治療を受ける子どもや保護者の心的負担の軽減や病院内の医療スタッフの医療環境への悩みの軽減につながるだけではなく、地域で大学生が果たす役割や意義などを問うきっかけにもなっているといえます。大学生にとっても、自身が生活している地域の病院の医師や看護師、保育士との交流を通して、地域が抱えている課題を発見し、関わり方や解決策を考えるきっかけになりました。また、その過程で生まれたそれぞれの思いを地域の方や学生同士で共有し、リレーのようにつないでいく充実感も得られたと思います。これからも今回の

小児科外来での彩色の様子①

小児科外来での彩色の様子②

ような学びや交流の機会をつくる必要性を感じています。今後は、診察室、キッズルーム、診療室などの環境改善や壁面と関連した題材の制作にも着手していく予定です。

本プロジェクトについては、静岡大学附属図書館ギャラリーにて、パネル発表及びギャラリートークを行い、そのプロセスや成果を報告しました（平成 29 年 2 月 24 日～ 3 月 16 日）。

謝辞

本プロジェクトにおいて、関わっていただいた静岡赤十字病院の関係者の皆様に感謝いたします。

プロジェクト参加者

企画部

内山　晃輔（静岡大学教育学部　美術・デザイン専攻　3 年）
石川　千尋（静岡大学教育学部　美術教育専修　4 年）
鈴木　麻琳（静岡大学教育学部　美術教育専修　4 年）
山本　直美（静岡大学教育学部　美術・デザイン専攻　4 年）
西澤　和倫（静岡赤十字病院　医局 小児科部長）
吉角　由紀（静岡赤十字病院　看護部所属 看護師）
望月　亜紀子（静岡赤十字病院　保育士）

制作部

企画部メンバーを含む、大学生・大学院生約 20 名

小児科外来での彩色の様子③

静岡大学附属図書館ギャラリーでの展示ポスター

8

島田市伊久美の地域活性化に向けた商品開発

竹下 温子 ｜ 教育学部准教授
川口 恭奈 ｜ 教育学部総合科学教育課程 4 年

島田市伊久美では、数年前から古民家を活用した山村と都市の人交流をテーマに、地域活性化を目指した取り組みを、NPO 法人伊久美楽山舎が中心となり地域住民を交えて行っている（図 1）。本研究はこの壮大な取り組みの一つである、古民家を利用した食品加工所にて生産・販売するための地域ブランドの商品開発を行う事を大きな目標とし取り組んできた。

島田市伊久美は明治時代に茶貿易で栄え、当時の古民家が数多く残る島田市北部の静かな山里で（図 1）、梅、椎茸、山菜、栗などが主産物であり、近年では、沢を生かした葉山葵にも取り組んでいる。伊久美は静岡の梅の主産地であるが、ほとんど知られていない上に、現在、農家で作る梅干しは 18%の塩で漬けており、商品化するには現代社会の求めるニーズに合っていない。そこで減塩方法を確立し、商品化を目指したいという相談を受けた。よって本研究は、近年伊久美で取り組んでいる葉山葵の抗菌性を利用した、「減塩わさび梅」を商品化するために、わさびの葉の添加量と梅仕込み時の減塩の検討を行い商品開発に取組むことを目的とした。

山葵の辛味成分や香り成分として知られるアリルイソチオシアネート（Allyl isothiocyanate;AIT）は、組織が破損することで抽出され、強い抗菌性を持つことが知られている。特に天然の食材としては珍しく、カビや酵母などの真核生物にもその抗菌作用を発揮する。そこで、本研究では 2 ㎝間隔に刻んだ山葵の茎を梅仕込みの際に一緒に加えることで、減塩によって繁殖されやすくなる、産膜酵母の繁殖を抑えることを期待し本研究を行った。

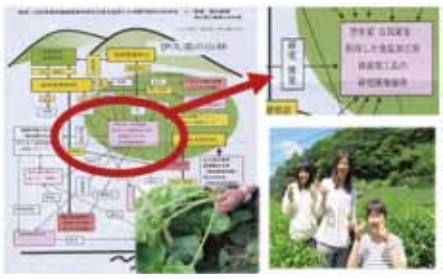


図 1．NPO 法人伊久美楽山舎による地域活性化計画と島田市伊久美の風景

1．「わさび梅」の仕込み

平成 28 年 6 月 28 日、7 月 6 日の 2 回に分けて、1 回目は伊久美産、2 回目は和歌山県産の南高梅を用い、昨年度減塩に成功した予備実験を参考に（伊久美で商品化している 18% の塩分濃度を基準に、15、12、10、8%に減塩、山葵は梅重量に対して 4%；図 2）、本研究では、塩分濃度を 6，8，10%の 3 濃度とし、山葵を 0，1，2.5，5，7.5，10% の 6 濃度にふって「わさび梅」の仕込みを行った（図 3）。

図２．予備実験結果

図３．仕込み手順と梅酢・梅干しの様子
（梅酢・梅干し；サンプル塩分 8% わさび 5%）

その結果、塩分濃度 6% のすべてのサンプルで梅酢が濁り、特に山葵の割合が低い梅に産膜酵母と思われる白い膜が張っていた。次に塩分濃度 8，10% で漬けたサンプルでは山葵の添加量が多い程梅酢が濁り、酵母発酵による気泡も多く発生していた。このことから、6% まで減塩することは難しいこと、また、8，10%の塩分濃度では、山葵を多く添加すると、山葵に付着している菌が梅酢中で繁殖してしまう可能性が示唆された。さらに、梅酢が上がり 1 週間以上たつと、多くの樽で梅酢の濁りが生じたため、山葵の抗菌効果は、

長く持続しないことが明らかとなった。よって梅酢中で、抗菌作用を示すと考えられる、山葵の AIT、有機酸量、pH、塩分濃度の測定を行い、梅酢の性状について検討していく事とした。

2．梅酢中の抗菌作用成分の測定

山葵の AIT は揮発性の物質で、水溶液中で不安定であることは知られている。よって、1 週間たった梅酢中にどの程度 AIT が残存しているか確認するために、静岡県工業技術研究所に委託し、梅酢中の AIT 量を測定した。その結果、全てのサンプルで検出できるほどの AIT が残存していないことが明らかとなった。さらに、抗菌作用を示す、有機酸、pH、梅酢中の塩分濃度についても測定を行ったが、梅酢の濁りとの関係性は見られなかった。

3．嗜好調査

嗜好調査は全 26 サンプルのうち、見た目で傷みが発生していない、12 サンプルを用い（図 5）、伊久美で漬けられている 18% の梅干しを基準として、島田市伊久美に在住の商品化に携わる 30 ～ 70 代の男女 13 名を対象に行った。調査内容は、酸味、塩味、香り、総合評価の 4 項目とし、香りについては山葵を感じたか否かについて判定してもらった（図 6）。

その結果、どのサンプルも現在の伊久美の梅干しよりも高評価であったが、統計処理の結果、有意差はなく、最頻値の高い 3 サンプル（塩分濃度 8 % の山葵 2.5、5、7.5 %）に絞り、衛生規範に満たしているか菌数測定を行った。

図 6．嗜好調査の様子

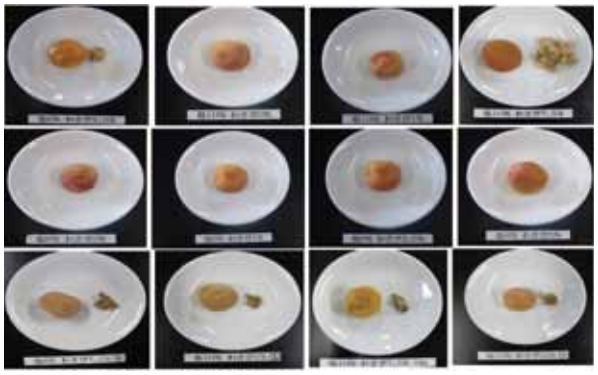


図 5．嗜好調査に用いた梅干し（12 サンプル）

4．菌数測定および梅酢中菌種の同定

菌数測定は、梅干しが完成してから、3,4 ヶ月目に測定を行った（図 7）。その結果、大腸菌数は 3 サンプルともに陰性で、F コープが独自で定める規定を満たしていた。次に一般生菌数、酵母菌数は、山葵 5% 添加が最も少なく、次に 2.5%、7.5% の順で増加した（図 7,8）。商品化するためには厚生労働省が定める漬物の衛生規範を満たす必要があるが、厚生労働省では、一般菌数の規定はなされておらず、産膜酵母菌が生えていないこと及び、容器に重鎮後、加熱殺菌したものについて酵母が 1000 個 /1g 以下と定められている。そこで梅酢中から検出された酵母の菌種同定を行った結果、Zygoascus hellenicus, Hanseniaspora 属と 100 % の相同性を示した。前者はヒトや動物が保菌しているとされ、梅仕込み中や、梅酢撮影中に感染したと考えらえた。また後者は腐敗した果汁から分離されたという報告もあり、梅酢中に腐敗菌が繁殖していることが明らかとなった。

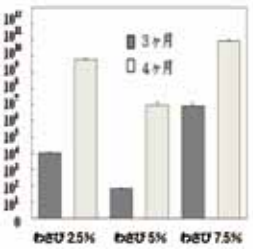


図 7．一般生菌数（3，4 ヶ月）

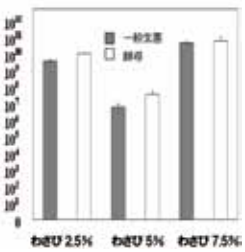


図 8．4 ヶ月目の菌数

5．まとめおよび今後の展開

本研究で仕込んだ 26 サンプルは、長期保存を考えると成功したものは無かったが、梅酢の性状や、梅酢中および山葵の付着菌を同定することによって、新たな注意点と可能性が見えてきた。まず減塩が成功しなかった原因として①山葵の AIT は揮発性の物質で、不溶性であり、梅酢が上がったのちは、その効果を失う事、②伊久美で大量に赤紫蘇を生産していないと言う理由から、赤紫蘇を加えなかった事の 2 点が考えられた。

これらを踏まえ、減塩わさび梅を作成するために 3 つのことが明らかとなった。1 つ目に 6% の減塩は天然の抗菌作用だけでは減塩が難しいこと。2 つ目に山葵を加えれば、加えるほど抗菌作用が発揮されるわけではなく、梅に対して 5% が最もその効果を示すこと。3 つ目に山葵添加量が 5% より少ないと梅に付着している菌が繁殖しやすくなり、5% より多いと、山葵に付着している菌が増殖しやすくなる。つまり、山葵の洗浄方法を確立し、AIT 量との関係をより詳細に検

討していく必要性が示された。

よって、今後の展開として、山葵の洗浄方法を確立後、塩分 8%、山葵 5%のサンプルを再度作成し、揮発性である AIT の効果を失わないように、山葵の蓋を開けずに梅酢の上りが確認できる透明な容器を用い、検討していく。さらに、赤紫蘇の添加や伊久美で有名な炭に着目し、炭を作る際に発生する、煙でいぶす、つまりスモークによる抗菌性の強化や容器重鎮後の殺菌などの検討を行い、保存性を高めた商品化を目指していく。

9

〈多文化共生〉放課後わくわくクラブ ～勉強と絵本でつながる子どもの輪～

矢崎 満夫 ｜ 教育学研究科准教授
田端　なつ実 ｜ 教育学部学校教育教員養成課程発達教育学専攻教育心理学専修２年
笠原　美樹 ｜ 教育学部学校教育教員養成課程教科教育学専攻家庭科教育専修２年
鈴木　彩女 ｜ 教育学部学校教育教員養成課程特別支援教育専攻２年

１．本プロジェクトの目的

本プロジェクトは NPO 法人 ONES（以下、ONES）と連携して立ち上げました。ONES は静岡大学の学生を主体としたボランティア団体で、外国とつながりのある子どもたち（以下、外国の子どもたち）に対する様々な支援活動を行っています。その ONES の活動の１つに「学校訪問型支援」というものがあります。

「学校訪問型支援」とは、静岡市教育委員会と連携をとり、外国の子どもたちが在籍する小・中学校で子どものニーズに合わせて、日本語・教科学習のサポートや教師・日本人の子たちとの関係を築く環境づくりなどを行う活動です。しかし、週１～２回の支援では学習支援においても、環境づくりにおいても、補えない部分は多くあります。そのため、「学校訪問型支援」を行っている時間以外にも、子どもたちのサポートができないかと考えました。

それから、外国の子どもたちに関わらず、子どもたちが抱えている問題は多くあると考えられます。まず、保護者が働いているなど何らかの理由で子どもの宿題の丸付けをしたり本読みを聞いたりするといった時間が取れず、勉強を見てもらうことができない場合があります。また、勉強に苦手を感じ学校の授業で周りのペースについていくことができない子どもも多く存在します。さらには、現在の学校では縦割り活動などの他学年とのかかわりが減りつつあるため、子ども同士の交流も少なくなっています。そのため、勉強についても子ども同士の関わりについても、子どもたちがよりよい学校生活が営めるよう、私たち学生ボランティアにできることがあるのではないかと考えました。

以上のことから、私たちは次の４つを目的として本プロジェクトを立ち上げました。

① 学校訪問型支援で補えない部分のサポートを行う。
② 保護者が忙しく、勉強を見てもらえない子どものサポートを行う。
③ 勉強が苦手な子どものサポートを行う。
④ 学校内でのコミュニティづくりを行う。

２．本プロジェクトの概要

本プロジェクトは、ONES と連携し、静岡市立宮竹小学校において全学年を対象に行うことになりました。平成 28 年 10 月 26 日に「宮竹キッズキャンパス」と称してスタートし、１月 27 日現在までに計８回実施してきました。基本的に毎週水曜日の 15 時 15 分から 16 時 15 分の１時間です。１年生だけは授業終了から宮竹キッズキャンパス開始までに１時間あるため、14 時 15 分から 15 時 15 分の間は基本的に自由時間とし、ONES メンバーが見守っています。現在、宮竹キッズキャンパスの登録者数は 297 人（１年生 73 人、２年生 81 人、３年生 55 人、４年生 36 人、５年生 31 人、６年生 21 人）であり、各回 200 人前後の子どもたちが参加しています。子どもたちは、学習室（１年生）、図書室（２年生）、家庭科室（３・６年生）、理科室（４・５年生）の４教室に分かれて勉強しています。

教室の黒板に掲示するスケジュール表

３．本プロジェクトの内容

ここからは、本プロジェクトの内容についてもう少し詳しく説明していきます。

まず、15 時 15 分から 16 時 15 分の１時間のうち、15 時 15 分から 15 時 55 分までの 40 分は勉強時間で、多くの子は学校で出された宿題に取り組み、わからないところがあると ONES メンバーと一緒に考えます。その他に、ONES 側が用意した学習プリントを行ったり、新聞や本を読んだり、自分の興味のあることについて調べたりなど、子どもたちの「学びたい」という

気持ちを大切にし、幅広い学びを目指しています。また、勉強に関するアンケートを各学年で行い、どの分野の勉強を子どもたちはしたいのか調査しました。その結果を、子どもたちのニーズにできるだけ応えられるような教材の研究に生かしていこうと考えています。そうした中、各教室では、ONES メンバーが子どもたちに勉強を教えるだけでなく、子どもたち同士の教え合い・学び合いも見られます。例えば、３・６年生の教室では、３年生のプリントの丸付けを６年生にやってもらったところ、６年生が３年生に間違えたところを教えており、目的④の「学校内のコミュニティづくりを行う」にもつながる、学年を越えた学習も生まれていました。

その後の 15 時 55 分から 16 時 15 分までの 20 分間は、ONES メンバーが企画した遊びを教室ごと、または全体で行います。ここで、今までに実施した遊びを紹介します。10 月 26 日のオリエンテーションでは、全員でおにごっこを行い、最後には子どもたちから「楽しかった」「またやりたい」という声を聞くことができました。その他に、紙ヒコーキ大会、メッセージカード作り（勤労感謝）、けいどろ、メディシングボール、クリスマスツリー作り、ジェスチャーゲームといった遊びを行いました。おにごっこやけいどろといった全体で遊ぶ遊びも、目的④の「学校内でのコミュニティづくりを行う」につながると考えています。

宮竹キッズキャンパスに参加している子どもたちに遊びについてアンケートを行った結果、「過去にやった遊びでおもしろかったもの」と「今後やってほしい遊び」のどちらについても、上位にけいどろやドッジボールといった外で体を動かす遊びが入っていました。私たちはこのアンケート結果をもとに、さらに子どもたちが楽しんで参加し、学年を超えた交流ができるような遊びを企画していきたいと考えています。

遊びのルール説明の様子

その他に、勉強と遊びだけでなく普段の行動につながる生活習慣をつけることも意識しています。例えば、宮竹キッズキャンパスの受付をする前に廊下にランドセルを並べて置くのですが、最初は乱雑に置かれており、やり直しさせることが多かったです。しかし、「１人１マス立てて置く」を合言葉に毎回声掛けをして、乱れている子には個別に注意することを繰り返すことで、段々と整理してランドセルを置くことができるようになってきました。また、机の上の消しカスを片付ける、移動するときは机を整えイスをきちんとしまう、ということもできるように日々声掛けをしています。

きれいに整頓されたランドセル

そして、これまでは勉強 40 分、遊び 20 分の通常の宮竹キッズキャンパスしか実施できていませんでしたが、今後は大学生の特技を生かした「体験活動」も企画していきたいと考えています。「体験活動」とは、宮竹キッズキャンパスに参加する大学生、すなわち ONES メンバーが先生となり、それぞれ得意とすることを子どもたちに教え、子どもたちに色々な体験をしてもらう活動です。例えば、音楽が得意な学生であれば楽器の演奏や合唱の指導、絵が得意な学生であればお絵かき教室、英語が得意な学生であれば英会話教室、といったように、それぞれの学生が特技を生かして子どもたちに色々な経験をしてもらえたらいいと考えています。この他に、パソコン教室、ダブルダッチ、演劇なども案としてあがっています。

私たちは、この宮竹キッズキャンパスを通して、ただ勉強に取り組むだけでなく、同級生や他学年の児童、大学生との関わりをもち、互いに学び合うことで、勉強の楽しさを知ったり、色々な経験をすることで様々なことに興味を持って取り組んだりしてほしいと考えています。子どもたちに宮竹キッズキャンパスについて感想を尋ねたところ、大学生に勉強を教えてもらえること、大学生と話せることに魅力を感じてくれている子が多くいることがわかりました。だからこそ、今後も子どもたちとたくさん関わる中で、多くのことが

経験できるような活動を提供していきたいと思います。

支援終了後の反省会の様子

4. 今後の取り組み

最後に、今後取り組んでいきたいことを２つ挙げます。

１つ目は、子どもたちそれぞれの勉強の目標を把握することです。最初に述べた目的４つのうち３つは勉強のサポートに関することです。「何を勉強したいのか」「どんなサポートが必要なのか」は子ども一人ひとり違います。できるだけ子どものニーズに応えられるように、子どもそれぞれの目標を把握したいと考えています。その取り組みの第１歩として、12 月に宮竹キッズキャンパスに関するアンケートを行いました。その結果を参考にして、個別に面談を行っていく予定です。

２つ目は、縦のつながりをつくれるような遊びを計画することです。目的の４つ目は「学校内のコミュニティをつくること」です。これまでも、できるだけ他学年との交流があるような遊びの計画を心がけてきましたが、全体での遊びは主におにごっこのような“個”の遊びでした。今後は学年関係なしのチーム戦など、「一緒に何かをする」という関わりがつくれたらいいと思っています。そして、その関わりが宮竹キッズキャンパスでないところでも続いていくような工夫を考えていく必要があると考えています。

水曜日になると子どもたちの会話の中に「キッズキャンパス」という言葉が頻繁に出てくるほど、子どもたちは楽しみにしてくれています。子どもたちそれぞれの、宮竹キッズキャンパスに来る目的は違うのかもしれません。それでも、「少しでも『勉強がわかった』と感じてもらえたら」「『楽しかった、また来たい』と思ってもらえたら」、そんな思いをもって私たちは毎回の宮竹キッズキャンパスを計画しています。これからも、「子どもたちのために自分たちに何ができるのか」を問い続けながら、様々な支援・交流活動を企画していきたいと思います。

10

英語力向上に関する地域連携モデルの教材化および静岡県域への拡大に対するサポート事業

山﨑 保寿 ｜ 教育学研究科教授
渋江　かさね ｜ 教育学研究科准教授
梅田　晃 ｜ 教職大学院２年、掛川市立大須賀中学校教諭

１．本事業の目的

文部科学省は、第２期教育振興基本計画（平成 25 年～ 29 年）の成果目標として、中学校卒業段階で英検３級程度以上 50％という数値目標を掲げている。次期学習指導要領の改訂を前にして、生徒の英語力向上のための取組を一層強化する必要から、文部科学省は「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」を打ち出し、小・中・高校を通じて、英語力の一層の向上を目指すとしている。

こうした中、本事業を実施した静岡県掛川市栄川中学校区では、市民総代会等の場で、中学生の英語力向上に関する要望が強く寄せられてきた。

そこで、本事業では、次期学習指導要領における英語力向上の動向を視野に入れつつ、英語モジュール学習の方法による英語力向上プログラムを実施し、その成果を検証するとともに、さらなる拡大と汎用化のための教材化を図ることを目的にした。

２．本事業の内容

⑴　英語モジュール学習の理論的背景

本事業で実施する英語モジュール学習が、中学生の学習として有意味なものとなるよう、理論的背景として、学びのユニバーサル化、学習の動機づけの理論等を置いている。学びのユニバーサル化とは、簡単に言えば、英語の苦手な生徒も前向きに取り組むことができるよう生徒の側に立った配慮をすることである。また、発達障害などの理由から、学習すること自体に困難を抱えている生徒もおり、そうした生徒への支援も取り入れている。

学習の動機づけの理論とは、動機づけを高めるための「3 つの心理的欲求」である「自律性への欲求」、「有能性さの欲求」、「関係性への欲求」を満たすため、生徒一人ひとりが意欲的に取り組むことができる方法の工夫を行ったことである。これらの要素をモジュール学習推進のキーワードとして捉え、学習の成果が上がるように配慮している。

⑵　英語モジュール学習の方法

英語モジュール学習の指導時間は、毎週金曜日の朝８時から８時 15 分の間である。まず、15 分間の山場となる課題を「１分間対話活動」と設定し、生徒は事前に準備をしないで、即興的な英語のやり取りを行うようにした。

山場である「1 分間対話活動」に向かって、表に示したように、⑴本時のテーマ（トピック）の確認、⑵対話の参考にするためのリーディング活動（Intake Reading）、⑶ターゲット文の確認を行う。⑷１分間対話活動の後は、⑸ペアで自分たちの対話を書き出すことで振り返り、⑹ペアで解決できなかった疑問をグループで教え合い、⑺最後に自分の活動の様子を評価する、という基本的な流れを固定化して設定し、毎回同じ流れにすることによって効率化を図った。

英語モジュール学習の方法①（Talk in groups）

英語モジュール学習の方法②
(Write your conversation)

英語モジュール学習の流れ

内　　容	時 間 配 分
⑴本日のテーマ紹介	30 秒
⑵ Intake Reading	2 分
⑶ターゲット文の確認	1 分
⑷ 1 分間対話活動	1 分
⑸振り返り①（ペア）	3 分
⑹振り返り②（グループ）	5 分
⑺本時のまとめ	3 分

1 分間対話活動で扱ったテーマは、中学生の身近で関心を持てる内容を選んだ。特に、英語への苦手意識の克服とコミュニケーション活動の活性化のために、対話に必要とされる主な文法事項は、そのほとんどが 1 年次の学習内容になるように配慮した。

⑶　英語モジュール学習の成果

英語モジュール学習の成果を検証するために、事前と事後の 2 回質問紙調査を実施した（調査対象：第 2 学年 36 名、有効回答率 100%）。

質問項目は 18 項目（5 段階法）であり、そのうち、9 項目の平均値が 4.0 以上を示しており、3.5 を下回ったものは 2 項目のみであった。

事前の質問紙調査で「(1) 英語の勉強が好きか」という質問に対して、肯定的回答（「4. どちらかというとそう思う」+「5. そう思う」）をした生徒は 16 名(44.4%)であったのに対し、事後の質問紙調査で「(1) 英語の朝学習に意欲的に取り組むことができた」という項目に対して肯定的回答をした生徒は 33 名（91.7%）に増加した。

また、学習指導要領の重点項目である「読むこと」に関しては「52.8% → 80.6%」、「書くこと」に関しては「47.2% → 88.8%」と増加への変化が見られた。さらに、6 割以上の生徒が、モジュール学習の中で感じた疑問点を自主的に調べたり、尋ねたりという行動に移したと肯定的に回答した。

その他、事後の調査では、「外国の人と会話したい」（肯定率 72.2%）、「英語力全体が伸びた」（肯定率 80.1 %）が高い割合を示した。

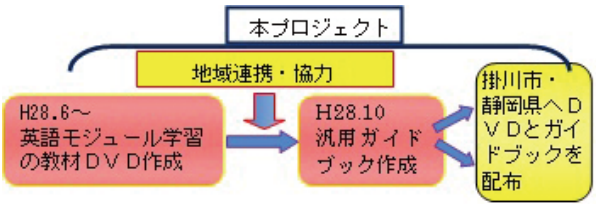
以上のように、英語モジュール学習を実施した結果、英語の学習が好きになった、英語力全体が伸びたと回答する生徒が増加し、関連事項を自主的に調べる生徒が増えるなどの効果が見られた。

3．地域連携モデルの教材化と静岡県域への拡大

本事業を実施する中で、地域住民や地区区長会長などが、英語モジュール学習を参観し、生徒の学習の実際を把握することができた。英語モジュール学習の取り組みは、地域の広報誌でも取りあげられた。そうした地域の関心の高まりをもとに、英語モジュール学習の方法を今後に繋げるために、地域連携モデルの教材化を行った。教材として、英語モジュール学習の方法を解説したガイドブックと DVD を作成した。同時に、教材集を CD に収め、それらをガイドブックとともに配布可能とした。

ガイドブックには、「英語モジュール学習の趣旨」、「学習の内発的動機づけの解説」、「英語モジュール学習の具体的方法」、「アクティブ・ラーニングの要素」、「指導者へのアドバイス」等を掲載し、地域と連携した導入がどの中学校区でも可能になるよう配慮している。また、次期学習指導要領の改訂により、小学校においても英語の教科化と拡大が図られる予定である。本事業の方法でガイドブックと教材等を活用すれば、今後、小学校における英語のモジュール学習や短時間学習の方法としても適用できるものである。

現在、本事業を実施した中学校では、学区出身の地域ボランティアが、英語モジュール学習の指導を引き継いでいる。このように、地域連携モデルとして実施した方法を教材化することによって、広く他の地域でも取り入れることが可能になった。さらに、英語モジュール学習のガイドブック、DVD、CD を静岡県内教育委員会へ配布する予定であり、今後、静岡県域全体へ拡大することが期待できる。



11

掛川市横須賀の在来作物「ニンジンイモ」継承のための「いいものねっこプロジェクト」

富田 涼都 ｜ 農学部准教授
増田 研佑、川合 里香、田中 爽一朗 ｜ 静岡大学人文社会科学部３年
松浦 直毅 ｜ 静岡県立大学国際関係学部助教
渡辺 梓、原田 京香、高林 睦菜、高尾 結美子 ｜ 静岡県立大学国際関係学部２年
前田 節子 ｜ 静岡英和学院大学短期大学部教授
小鹿 祥子 ｜ 静岡英和学院大学短期大学部助手
堀内 佐季、小澤 爽乃、中川 美咲、山崎 千嘉 ｜ 静岡英和学院大学短期大学部２年
中澤 茉莉 ｜ 静岡英和学院大学短期大学部１年
花森 功仁子 ｜ 東海大学海洋学部　非常勤講師
望月 碧 ｜ 東海大学海洋学部４年

１．はじめに

本プロジェクトは、学生が「歴史・文化・人」が魅力的な静岡県掛川市横須賀地区に興味を持ったことをきっかけとして始まった。横須賀には、長い歴史を持つ三熊野神社大祭、街並みや住宅をそのまま展示会場にする「遠州横須賀ちっちゃな文化展」など、地域ぐるみの様々なイベント･行事が多い。また、調味料の「さしすせそ」５つすべてが地場産で揃い、地酒「葵天下」や工芸品などの産品も多く、多様な特徴を持つ地域である。

その中で、私たちは「ニンジンイモ」という在来サツマイモに注目した。鮮やかなオレンジ色でねっとりとした甘みを持っており、一部にはリピーターも多い。しかし、横須賀では栽培の難しさや採算性の問題から、現在ではニンジンイモの生産者は 93 歳の女性ただ一人となってしまった。

図１　にんじん芋

２．プロジェクト概要

そこで、本プロジェクトの目的は、地域の風土を活かした商品化、広報の取り組みを通じてニンジンイモの生産者を増やすことである。加えて、ニンジンイモを中心とした活動を通じて横須賀ならではの様々な魅力を発信し、地元の方々に協力を得ながら地域を盛り上げることを目指している。

また、コンセプトとして、デザイナー迫田司氏の提唱する地域の人と一緒に地元に根差したデザインを考えていく「地デザイン」の考えを取り入れている。具体的な活動内容は、現地調査班、試作班、広報班、デザイン班、の４つの班に分かれての活動と、全体でのミーティングやイベント開催などである。

３．四つの班の活動

図２　現地訪問の様子

現地調査班は、より深く地域とその魅力を理解し、地域の方々の考えを学ぶために現地訪問を行う。特に横須賀で唯一のニンジンイモ生産者の女性に注目し、密着取材を重ねた。その中で実際に畑を訪れ、農作業をしている姿だけでなくその人柄にも触れることができた。

広報班は、プロジェクトの地元広報と地元の方からの新たな情報提供を目的に、2016 年 5 月から広報チラシ「いいものねっこ通信」を発行している。内容は、日頃の活動やイベント、ニンジンイモの詳しい情報などである。配付はメンバーが実際に現地を訪問し、できる限り手渡ししている。毎回、現地の商店や公民館など約 20 カ所以上に配布しているが、毎回最新号を店内に掲示して下さる方もおり、プロジェクトと現地をつなぐものとなっている。また、手渡しをすることによって、学生と地域住民との情報交換や交流のきっかけにもなっている。

試作班は、具体的な商品開発のため試作会を実施した。普段ニンジンイモを食べていない人にも興味を持ってもらうため、ジャムやパイ、パン生地に混ぜて

図３　第１回試作会の様子

みるなど、従来の食べ方にはないレシピへ挑戦してきた。2016 年は、試作会を 4 回行い、ニンジンイモやその切り干しを使ったジャム、クッキー、コロッケ、パスタなど、学生オリジナルのメニューを試作、試食して改良を繰り返した。考案したメニューは、冊子にまとめ、後述するイベントなどで配布した。

デザイン班は、商品のパッケージのデザイン案の考案を担当した。現地訪問やワークショップで発見したニンジンイモやその生産者、横須賀という地域の魅力がパッケージから伝わるようなデザインを目指した。制作過程では、デザイナーの方から受けたアドバイスやレクチャーを踏まえ、最終的に 4 つのデザイン案にまとめることができた。それぞれ、生産者を強調したもの、横須賀独特のイメージを伝えるものなど、異なるコンセプトとなっている。イベント等では、実物の見本を作成し、展示と投票を通じて地域の方々の意見をフィードバックした。若者層から見た目が分かりやすいロゴマークがいいという声が多いなど、世代によって意見の特徴があるなどの発見があった。

４．現地ワークショップや「ちっちゃな文化展」

こうした活動の重要な節目として、現地ワークショップを行い、「ちっちゃな文化展」にも出展した。ワークショップでは、地元の方々とデザイナーの方をお呼びし、プロジェクトのこれまでを発表、今後の商品化の方向性を考えた。7 月 17 日に行った際には、スライドショーや紙芝居を使って発表し、来ていただいた地元の方約 20 名から様々な意見をいただき、好評だった。

図４　パッケージ案の一例

また、10 月 21 日から 23 日までの 3 日間、「遠州横須賀ちっちゃな文化展」に出展した。展示を通してこれまでの活動を伝えるため、メンバーはパネルなどの展示ブース、のぼり旗、試食などを夏休みから準備した。また、試食コーナーやパッケージの展示コーナーでは、来訪者からの意見を取り入れる場を作った。

3 日間で地元内外から約 200 名の方にお越しいただき、1 日目はコロッケ、クッキー、ジャムの 3 つ、2、3 日目にはクッキーとジャムの試食を提供した。来訪者からは「家でも作ってみたい」や「切干しで作るなんて斬新、さつまいもが苦手でも美味しく食べられた」などの意見をいただいた。一方、「切干しの食感が少し固い」、「ジャムはリンゴのジャムと間違えそう」、「ジャムに滑らかさが欲しい」といった意見もあり、今後の発展に生かせるアドバイス得ることができた。また、文化展には小さな子どもの姿も多く見られ、私たちのブースにも足を運んでくれた。子供たちが目を輝かせながら美味しそうに試食している姿が印象的であり、お客さんの喜ぶ顔が判断指標になることも学んだ 3 日間だった。

図５「ちっちゃな文化展」での発表

５．おわりに

一連の活動によって、現地の方へ私たちの活動を伝え、ニンジンイモの現状、私たちが見つけた横須賀の魅力についても多くの人に伝えることができた。現在プロジェクトは、3 月の商品販売の実現に向け引き続き活動している。

活動の中で現地の方からは、「若い人たちが自分たちの地域でがんばっているだけでうれしい」という声を聞くことが多い。横須賀に住む人たちからすれば当たり前の事でも、私たちから見た横須賀は新たな魅力に溢れている。そんな横須賀の魅力を私たちなりの方法で発信することで、地元の方も改めに魅力に気づき、誇りを持ってもらえるようにしていきたい。

12

浜松市における自然・歴史観光のための インタープリター育成教材の開発事業

杉山 岳弘 ｜ 静岡大学情報学部情報社会学科 教授
村井 梨乃 ｜ 情報学部情報社会学科４年、浜松鈴鈴前編集長
鈴木 祥子 ｜ 情報学部情報社会学科３年、浜松鈴鈴編集長　他５名
山口 安司 ｜ 浜松南高等学校 教諭　他 地歴部 生徒２名（1・2年生）

1．はじめに

浜松市にはボランティアガイドの組織やホテル従業員などによる観光ガイドはあるが、インタープリターといった専門的な解説技法の知識を持ったガイドやそれを育成する組織はない。新東名の開通、訪日外国人の増加、2017 年には大河ドラマ「おんな城主 井伊直虎」が放映される等、観光への追い風があり、特に自然・歴史の観光地の魅力を伝えるためには専門のガイドを育成することは急務であり、浜松市も強く認識している。そこで、本事業では、昨年度の「浜松鈴鈴」発行事業の取材力を生かし、観光の知識に、専門のインタープリターのガイドの知識を加えた、インタープリター育成教材の開発を行う。

2．実施概要

浜松市の奥浜名湖を中心とした観光エリアは自然の立地と歴史的熟成の条件が重なり注目が高まっている。この観光エリアの中でも、大河ドラマで注目されることが予想される龍潭寺に着目し、龍潭寺が持つ観光情報とインタープリター育成の知識の両面を持つ教材を開発する。これまで浜松鈴鈴で培ってきた取材力と地域との信頼関係を最大限に生かし、龍潭寺の自然・歴史に関する観光情報のコンテンツと、プロのインタープリターでもある NPO 法人 ITOE 理事長の宮田岳氏の協力・監修の元、インタープリターを育成するコンテンツを制作する。また、「浜松鈴鈴」の直虎漫歩について、9 月号から浜松南高等学校の地歴部と連携し、共同で記事を作成する。作成した記事は浜松商工会議所発行の「NEWing」の直虎旅譚との連動企画として同誌にも掲載する。

3．教材の開発とガイド育成講座の試験的実施

インタープリターの行うガイドには、インタープリターの話し方や聞き手とのコミュニケーション等、写真や文章だけでは正確に伝えることが難しい要素が含まれる。そのため、今回、映像コンテンツを用いて学習できるよう、スマートフォンやタブレット端末を閲覧デバイスとする電子教材を開発する。

(1)　教材の開発

龍潭寺を対象としたインタープリター育成教材を開発するにあたり、龍潭寺をガイドする際に必要な情報を検討した。その結果、①井伊家・井伊直虎に関する解説、②インタープリテーションに関する解説、③龍潭寺の観光情報に関する解説の 3 部構成にすることとした。

①について、龍潭寺は井伊家の菩提寺となっており、大河ドラマで取り上げられる井伊直虎ともゆかりの深い場所である。そのため、龍潭寺の歴史をガイドする上で、龍潭寺と井伊家・井伊直虎との関係性を理解しておくことが望ましいと考えた。解説文には、「浜松鈴鈴」2017 年 1 月号の直虎漫歩にて掲載した、龍潭寺の記事を引用した。また、井伊直虎に関する解説事例として、「浜松鈴鈴」の監修者である E アーキテクトの鈴木厚夫氏による解説の様子を撮影し、龍潭寺と井伊直虎にまつわる歴史について映像を通して学習できるよう解説映像コンテンツを制作した。

②について、インタープリテーションに関する書籍は存在するが、インタープリテーションの経験がない人にとっては書籍だけを通して一般的なガイドとの違いを理解し、実践するのは難しい。そのため、宮田氏に、インタープリテーションの考え方やガイドプログラムの作成手順の解説文を作成してもらった。また、プロ

インタープリター育成教材のページの一部

によるインタープリテーションを見たことがない学習者向けに、渭伊神社で「渭伊神社の名前の由来」をテーマとした宮田氏によるインタープリテーションの様子を撮影し、事例映像コンテンツを制作した。

③について、龍潭寺にある歴史的な展示物や庭園といった自然に関する知識を、場所の雰囲気とともに学習できるように、1 分以内の短い解説映像コンテンツを制作した。また、龍潭寺の展示物の一つに 250 年前の龍潭寺境内の様子を描いた古地図がある。この古地図と現在の龍潭寺境内の様子を比較できるようにするため、龍潭寺協力のもと、NPO 法人 ITOE が小型ドローンを飛ばし、上空から見た様子を撮影した。このドローン映像も用いて学習コンテンツを制作した。

⑵　インタープリター育成講座の試験的実施

開発した電子教材を使いプロのインタープリターを育成するにあたり、電子教材の良い点・課題点を確かめるため、インタープリター育成講座を試験的に実施した。

日時：2017 年 2 月 8 日（水）13：30 ～ 15：30
場所：風杏
受講者：ガイド活動に関心はあるが学習や実践経験のない 3 名
講師：NPO 法人 ITOE 宮田岳氏
内容：最初に今回の講座および電子教材の趣旨を説明した後、開発した電子教材を用いて宮田氏による解説を 1 時間程度行った。

講座終了後、受講者へ聞き取り調査をした結果、電子教材であるため紙と違ってかさばらず、インタープリテーションの解説文がわかりやすいことがわかった。その一方で、教材の内容の一部は補足説明がないと正しく理解するのが難しく、さらに初心者では話の膨らませ方やガイドの流れ等を考えるのが難しいため、参考として龍潭寺での事例映像もあるとわかりやすいことがわかった。

ガイド育成講座の試験的実践時の様子

4．事業の結果と効果

本事業では、プロのインタープリター育成を目指し、奥浜名湖を中心とした観光エリアの中でも龍潭寺に着目し、インタープリター育成のための電子教材を開発した。その一環で、ドローンを使ってこれまでになかった視点から龍潭寺を伝える映像を、NPO 法人 ITOE が撮影した。撮影したドローン映像は龍潭寺からの依頼により、Web 上でも公開された。テレビ朝日「羽鳥慎一モーニングショー」の 2017 年 1 月 31 日放送分等、複数のメディアで映像素材として使用され、龍潭寺への関心をさらに高めることへつながったと考える。

また、「浜松鈴鈴」の 9 月号の直虎漫歩から、浜松南高等学校地歴部と連携し、共同で計 4 本の記事を作成した。浜松商工会議所の「NEWing」の直虎旅譚との連動企画では、計 7 本の記事が掲載された。

さらに、本事業を通して、インバウンドサポート事業として IN HAMAMATSU.COM を運営する株式会社 mocha-chai と新たにつながりを持つことができた。若者を対象としたインタープリター育成において連携をとっていくことを確認し、龍潭寺を対象としたプロのインタープリターを育成する準備が整った。

5．今後の活動

今後は、今回のガイド育成講座にて明らかになった課題点の改善を行い、さらに龍潭寺以外の自然・歴史観光のスポットをインタープリテーションできるようにするための電子教材を開発する。また、龍潭寺や株式会社 mocha-chai、NPO 法人 ITOE と連携し、主に浜松市に住む学生や若者を対象としてインタープリター育成講座を実施し、若い世代のプロのインタープリターの育成を進める。

謝辞

撮影にご協力いただきました龍潭寺の皆様ならびに E アーキテクト鈴木厚夫様、ガイド育成講座の試験的実践にご協力いただきました受講者の皆様、電子教材開発にご協力いただきました NPO 法人 ITOE の皆様に厚く御礼申し上げます。

13

障害者就労支援事業

猪谷 一騎、岡野 紗英、吉田　順也、平野 紗貴 ｜ 情報学部生
田中宏和研究室

1．はじめに

浜松市は、障害者優先調達方針を明らかにし、障害者雇用セミナー等を開催するなど、障害者就労支援を行っているものの実態としては進展しているとは言えない。

そこで、今回は、昨年度に行った「地域連携応援プロジェクト：農業の六次産業化」の活動成果を発展させ、新たに障害者就労支援事業に取り組む。

近年では、社会の変化や法律の改正により、障害者の雇用の場は急速に広がっている。そこで、障害者の経済的自立を助けることを目的とした多くの企業、社会福祉法人がある。浜松市浜北区にある社会福祉法人「みどりの樹」では、障害者の支援を行い、障害者に働く場を提供している。

また、農業は地域の社会資本であり、地域活性という面でも農業が注目され始めている。本プロジェクトでは浜松地域の農家が集まり、六次産業に取り組もうとしている NPO「百姓のチカラ」とも連携し、協働でプロジェクトを推進してきた。

2．プロジェクトの概要

まず、今回の活動の目的は、「みどりの樹」と「百姓のチカラ」、それぞれの団体がもつ「強み」を引き出して「弱み」を補完し合う関係づくりを構築することである。これにより、①障害者の就労機会の拡大、②共同イベントによる地域社会との交流促進、③六次産業化の推進、④両団体の社会的な認知度の向上、の 4 つを実現していく。

今回のプロジェクトでは、「百姓のチカラ」と「みどりの樹」が相互に利得を得られることが重要である。そこで、即売会を行うことで、先ほど述べた 4 つの目的を達成できるのではないかと考えた。即売会というのは、普段とは違う場所で商品を展示し、その場で売買を行うものである。「百姓のチカラ」では、定期的に即売会を行っており、即売会を開く機会を求めている。

また、「みどりの樹」では、就労支援を行っていて、そのひとつとして「なないろカフェ」がある。「なないろカフェ」は、駅前ということ、区役所に隣接していることもあり、人通りが多い。そこで、「なないろカフェ」で即売会を開催することで、今回のプロジェクトの目的を実現できると考えた。

この即売会を開催するにあたって、問題があることが明らかになった。「なないろカフェ」の元来のレジシステムでは、さまざまな種類のものを売る即売会では、困難であった。また、在庫管理や請求処理ができるシステムがなく、これらのシステムを構築する必要があるとわかった。そこで、このシステムの開発を分担して行った。

それから、もうひとつシステムの開発を行ったものが派遣システムである。「百姓のチカラ」では、人手が不足しているのが現状である。収穫時期に人手がほしいという「百姓のチカラ」と障害者に働く場所を提供したい「みどりの樹」で、協力することでこの問題は解決できると考えた。これを可能にするためにシステムで、仕事の依頼を受託、受理できるようにする必要があると考えた。これが、派遣システムである。

このことから、われわれが分担して開発にあたったシステムは、(1) カフェシステムと (2) 派遣システムの 2 つである。

3．開発したシステムの特徴

(1)　カフェシステム

(i)　事務処理システム

図はカフェシステムの事務処理に利用するシステムのメインメニュー画面である。従来ではローカル上に在庫、発注、売上、購入品といったデータを Excel で

年度ごとに保存していたため膨大な量のデータがパソコン自体に蓄積されていた。しかしこのシステムではそれらのデータをクラウド上に保存し管理する。そのためデータの増加によりコンピュータの動作が重くなるといったことはなくなる。購入品登録画面では従来行っていたレシート単位での購入品登録に加え、売上登録の自動化に伴い減少したメンバーさんの仕事確保のためレシートの詳細を登録する機能も搭載した。

また利益確認では従来月単位でしか確認できなかった売り上げの推移を日、月、年といった期間を指定し、一定の期間内でどの種類またはどの商品がどれだけ売れたのかの確認をすることができる。それにより時期や時間帯によりどういった商品の売り上げが上がるのかの確認が可能となり、今後の商品売上の予測につながり、売上の高い商品を多めに発注することができる。

(ii)レジシステム

図はレジシステムのレジ画面である。レジシステムでは従来レジ内部でのみ行われていた売上の登録を、ネットワークに接続することにより(i)の事務処理システムと共有のデータベースに売上データを登録する。そのため、その日ごとに手作業で入力していた売上データはレジへの入力とともに自動でデータベースに蓄積されるようになり、そのような作業の効率化に伴い入力ミスを防ぐことにつながった。売上データは客層、購入時間も登録できるため事務処理システムの利益確認画面ではどの時間帯にどういった客層が購入しているのかも確認することができる。ボタンでの操作だけでなくバーコードによるレジ処理も行うことができるため、繁忙期に混雑していた会計時間の短縮が見込まれる。

また、このシステムではカフェの前で不定期に開催する百姓のチカラの即売会でも利用可能である。即売会毎に各農家の売上がわかり、カフェ側から百姓のチカラへの委託料の請求書も発行可能であり、在庫数も確認できるため即売会後の処理もスムーズである。ゆえに今後ますます即売会を開催しやすくなり即売会の機会が増加することが見込まれる。

(2) 派遣システム

近年、農家では人々の１次産業離れにより人手不足が深刻化おり、実際に百姓のチカラの会員である農家の方々も農作物収穫時期における人員不足に頭を悩ませている。

これは、障害者の就労支援の一環として収穫時期に障害者を農家へ派遣する仕組みを支援するシステムである。

図は、派遣システムのメインメニュー画面である。農家の方が、就労支援を行っている団体（みどりの樹）に派遣依頼をし、その依頼をみどりの樹が依頼情報をシステムに登録する。派遣が完了したら、そのことをシステムに登録し、派遣した障害者の作業日報を登録するという流れになっている。

現在は、みどりの樹から派遣する体制作りを行っているが、将来的には複数の団体から派遣できるシステムにすることを期待しているため、所属の登録もできるようにしている。

４．おわりに

今回のプロジェクトは、２つの団体と連携して、プロジェクトを推進してきた。障害者の雇用機会の拡大を目指している団体と零細農家が集まり六次産業化を目指している団体が連携することにより、それぞれの団体がもつ「強み」を引き出し、「弱み」を補完し合う関係を構築することは十分に可能である。

今回われわれは、これを実現するために２つのシステムを開発してきた。(1)カフェシステムの導入効果として、在庫の管理、売上の確認ができ、作業の効率化が期待される。(2)派遣システムの導入効果としては、障害者の就労機会の増加、農家側の労働人員不足の解決があり、労働力提供を効率化が期待される。

だが、今回どちらのシステムも導入までに至らなかった。(1)カフェシステムの方は、開発している中で、必要な機能が増えたこともあり、進行の遅れがあった。だが、レジシステムは、実際に即売会で試験的に導入

しており、スムーズに即売会を行うことができ、成果が得られた。今後、事務処理システムも導入し、実際にシステムを利用してもらい、成果を見ていく。

また、⑵派遣システムの方は、進行の遅れも原因であるが、開発以前に導入が見送られ、導入まで至らなかった。今後、実際にこのシステムを利用して、労働力の提供がスムーズになり、効率化が図れることを両団体に体験してもらうことで導入が可能だと考えられる。

今回のプロジェクトは限られた短い期間であり、まだ導入に至っていないが、静岡県下の農家の方々、就労支援を行っている団体に今後の成果を伝えていきたい。

今回のプロジェクトに全面的にご協力いただいた社会福祉法人みどりの樹代表海野さま、NPO 百姓のチカラ代表鈴木さまに感謝申し上げます。

14

静岡大学は大きな自然公園
～植物・野鳥・昆虫の観察会を通じての地域連携プロジェクト～

宮澤 俊義 ｜ 技術部静岡分室 技術長
木野 瑞萌、山本 千尋、剣持 太一 ｜ 技術職員

1．はじめに

約 15 年前に静大キャンパスの樹木に、大学側の要請で、400 枚のネームプレートを取り付けた。その際に静大キャンパスの樹木マップと樹木リストを作成した。一部は静大創立 50 周年記念冊子にも利用された。「静大キャンパスは一つの大きな植物園」と言うコンセプトで付けたネームプレートは高い評価を得た。

年月は流れ、ネームプレートの存在も薄れつつある中で、静大キャンパスの自然を何より知り尽くしている、本プロジェクト責任者が、植物と野鳥・昆虫を合わせた自然観察会を開催して、豊かな自然に囲まれた静岡大学の魅力と自然の素晴らしさや、生物多様性の必要性などを地域に皆様に体感してもらうプロジェクトを計画した。

野鳥の観察の様子

2．目的

静岡大学は、日本平有度山の麓に位置し、広大なキャンパスは自然豊かで、一つの大きな自然公園とも言える。この立地を生かして、植物・野鳥・昆虫を含めた自然観察会を一般市民向に開講した。自然好きの方々にはもちろん、今まで自然や生物に関心のなかった方々にも植物と動物を合わせた、総合的な自然観察会を開催して身近な自然の素晴らしさ不思議さを体感してもらい、自然公園としての静岡大学キャンパスの魅力を地域の方々に還元するのが本プロジェクトの目的である。

第一回目の自然観察会のポスター

3．内容

申請時直後は、梅雨入りや夏に入ってしまうので、思い切って、秋から冬にかけての静岡大学の自然の魅力を観察会を通じて伝えることにした。秋にはキャンパス内のアメリカフウやイチョウ･ナンキンハゼなど、素晴らしい紅葉が人々の心を魅了し、昆虫は美しい鳴き声を、鳥は落葉した木々の間から顔を出し、気候も良く、自然観察には適した季節になる。冬は昆虫は姿を消し、落葉樹や常緑樹から野鳥が姿を見せる。春の訪れとともに、新芽や若葉の季節になる。早咲きの桜が受験生を迎えてくれる。スタッフには植物・野鳥・昆虫を専門にしている技術職員が、それぞれの自然観察の解説を行い、実施責任者がそれぞれを融合させた解説を行った。植物・野鳥・昆虫の観察を融合させた自然観察会は、他にはあまり見られない。また観察会までに植物、野鳥のリストを作成した。

４．計画及び実施

当初、秋の紅葉の季節から観察会を実施する予定であったが、秋のキャンパスフェスタ前後で行事が重なってしまったことや、天候に恵まれなかったことなどで、年内の観察会の実施が困難になってしまったので、天候が安定する年明けの１月と３月にそれぞれ観察会を開催した。冬は樹木は落葉するが、野鳥観察の絶好の時期でもあったので、野鳥の専門家の、木野技術職員を中心に、野鳥観察をメインに 2017 年１月 29 日（日）に第一回の自然観察会を実施した。あらかじめ野鳥や樹木のリストを作成し、雨天の場合に備えて、実習室で講義や顕微鏡を使用した簡単な実験も用意した。募集人数は 20 名程度とし 11 名の参加者があった。静岡市内、清水区、浜松市、袋井市、伊豆の国市からの参加者があった。

キャンパス内の散策

野鳥観察の合間の植物の解説

野鳥を双眼鏡で観察しながら合間に植物の解説を交えながら、身近に生息している綺麗で可愛らしい野鳥を多数観察することができた。ヤマガラ、シジュウカラ、ヒヨドリ、メジロ、ジョウビタキ、ハクセキレイ、イソヒヨドリ、アオジなどが観察できた。植物も樹木を中心に、メタセコイヤ、ユリノキ、クスノキ、アメリカフウ、ケヤキ、ムクロジなどを観察した。野鳥・樹木に昆虫観察を加えて、第二回自然観察会を３月 20 日（月）に行った。

５．効果

気楽な雰囲気で、アカデミックさは残しつつ楽しくキャンパス内の観察ができた。ふだん入る機会があまりない大学で、植物園や動物園にいるような感覚で、自然に対する理解を深めてもらった。時間の経過と共に参加同士やスタッフとの関係も親密になり、疑問点や感じたことも多く言ってもらえた。大学の自然の素晴らしさも理解してもらえた。静岡大学の良いアピールの機会にもなったとともに、自然を通じての地域に活性化にも大きな効果が有ったと思う。

６．今後の展開

第一回目の観察会は大学の HP に短期間の掲載にも関わらず、県内各地からの参加者があった。地域の方々が、大学に期待しているのが実感できた。高齢者が多かったが、大学の有効利用や自然観察の場としての大学キャンパスの利用など、まだまだアイデアは無数にあると感じた。普通の観察会では体験できない場を今後も考えていきたいと強く感じた。

第二回目の自然観察会のポスター

15

地域でつなぐ伊豆半島ジオパークと防災

山本 隆太 ｜ 教職センター学術研究員
勝又 壮平、杉山 尚暉、太田 智輝、梅田 和典、服部 智美 ｜ 地域創造学環 1 年

1．本プロジェクトに至る経緯と目的

静岡県東部に位置する伊豆半島は、県内でも人口減少と高齢化の激しい地域であり、地方創生が課題となっている。伊豆半島は火山や滝などの恵まれた自然環境を活用した温泉地や行楽地が数多く存在する。これらを包括的にまとめ、地域振興として進める目的で、UNESCO プログラムであるジオパークに取り組んでいる。伊豆半島ジオパーク推進協議会は 2010 年 6 月に設立され、自然・地質の保全、教育、観光を推進してきた。現在では、防災の取り組みを推進することが課題の一つとなっている。とりわけ、2013 年の静岡県第四次地震被害想定によると、伊豆半島の海岸部では津波被害が想定されおり、高齢化が進む地域での防災活動は喫緊の課題となっている。

報告者は 2015 年末より有志メンバーを中心に、平成 27 年度伊豆半島ジオパーク住民認知度調査（2016 年 3 月報告）の分析・考察などを通じて伊豆半島ジオパークとの連携を図ってきた。2016 年度の本プロジェクトでは, 伊豆半島ジオパークの課題でもある「防災」をテーマとして、静岡大学生が地域住民、ジオパークガイド、ジオパーク推進協議会などの地域のアクターと協働し、「伊豆半島ジオパークらしい防災」を確立することを目指し、事業に取り組んだ。

2．本プロジェクトの概要

伊豆半島ジオパークにおいて課題となっている防災活動を推進するため、地域創造学環の環境防災コースの学生を中心として事業に取り組んだ。

地域創造学環は、地域社会の抱える様々な問題に対処し、より活力にあふれた魅力的な創造をできるような人材を育成することを目的とした組織である。本プロジェクトと課題意識を共有する学生 5 名（勝又壮平、杉山尚暉、太田智輝、梅田和典、服部智美）が中心となり、ジオパークと防災のコラボレーションについて企画・検討するとともに、ジオパーク全国大会でのポスター発表や、日本地理教育学会での資料作成等を行った。また、地域住民とジオパークガイドを対象とした DIG（災害図上訓練）の研修を予定している。

写真 1　藤井ゼミとの防災教育合同研究会

なお，本プロジェクトを進めるにあたり、静岡大学教育学部で防災道徳を推進する藤井基貴ゼミと共同でゼミや勉強会を実施した。防災道徳の取り組みから、ジオパークにおける防災活動においても、「考える」視点が重要であることを学んだ。

3．ジオパーク全国大会でのポスター発表

2016 年 10 月 10 日より沼津のプラザヴェルデにおいて、第 7 回日本ジオパーク全国大会伊豆半島大会が開催された。本大会では全国から集まった研究者やジオパークガイドに加え、伊豆半島の高校生などにより、ジオパークに関するポスターセッションが開催された。本プロジェクトメンバーは、「伊豆半島ジオパークにおける防災の可能性」（図 1）というタイトルでポスターセッションを行った。

ポスター会場にて周りのレベルの高さを経験しつつ、参加者のジオパークへの情熱を直に感じることができた大会となった。

4．日本地理教育学会静岡例会での防災資料作成

2017 年 1 月 29 日、静岡市内の DenBill において、「地理教育における防災」という題目で日本地理教育学会静岡例会が開催された。本プロジェクトでは、防災に関する学会が静岡市内で開催されるということで、静岡市内の大きな災害である七夕豪雨（1974 年）と、それに伴う大谷川放水路建設（1974 年）に関する説明資料を作成し、日本地理教育学会の関係者に配布した。

図１　ジオパーク全国大会での発表ポスター

当日の学会発表では、袋井市、焼津市、沼津市と県内各方面の学校の教員が集い発表を行った。そこから、学校教育における防災学習の現状と課題について学ぶとともに、とりわけ、地図を活用した防災学習からヒントを得て、伊豆半島ジオパークでの防災関連ワークショップでは DIG を実施することとした。

５．ジオパークと「持続可能な発展のための教育」

2017 年 2 月 16 日，伊豆市の修善寺総合会館において、伊豆半島内の学校教員を対象として、ジオパークの見方・考え方に基づいて地域の課題を考えるワークショップが開催された（写真 2）。

このワークショップに対して本プロジェクトは、ワークショップで出された地域の課題の一覧から、伊豆半島内の教員の意識における防災の位置づけについて分析する役割で参画した。その結果、学校での防災は、教員・児童生徒の「知識不足」によって「低い防災意識」に留まっている現状であることがわかった。特に、「教員の多忙化」や、「教員の世代交代」がうまく進んでいないため、学校での防災に関する知識や意識が、学校教員の間でもつながっていない問題が推測された。

また、学校教員は、定期的に人事異動があり、学校区の地域についてわかり始めたころにはまた異動となってしまう。そこで、地域に暮らす住民やジオパークガイドなど、学校が地域との連携を強めることではじめて、学校における防災の知識や意識を蓄積・継承していける可能性が示唆された。

以上について、伊豆半島ジオパーク推進協議会担当者に報告するとともに、改めて、地域住民であるジオパークガイドに対して、防災ワークショップを実施する必要があると考えた。そこで、伊豆半島ジオパーク推進協議会の専任研究員鈴木雄介氏と打ち合わせを行い、西伊豆地区での DIG の可能性を検討した。

写真２　ジオパークの地域課題と防災

６．これからの展望

当初の予定通り、伊豆半島ジオパークの西部に位置する松崎町又は西伊豆町で、DIG を活用したワークショップを開催するという形で活動を発展させていく。地元のジオパークガイドとも連携しながら、公民館等を活用してジオパークでの防災活動について普及活動を展開する。すでに、西伊豆中学校を中心とする西伊豆地区では、ジオパークガイドによるまち歩きと防災地図作りを組み合わせた「My 防災マップづくり」が進められているため、こうした既存の取り組みと連携しながら、更なる発展を目指したい。

また、今年度は学校教育との関わりを数多く持った。その中から、伊豆市内にある学校より、ジオパークを活用した防災教育を考えており、協力を得られないかという連絡を受けた。やはり、学校も防災を進めていく上で、地域とのつながりを必要としている。次年度以降は、防災を軸として学校と地域、そしてジオパークをつなぎながら、地域の課題解決に向けた地域連携の基盤を強化していくための活動を進めたいと考えている。

発　行　日　　平成29年3月
発　　行　　国立大学法人静岡大学 イノベーション社会連携推進機構 地域連携生涯学習部門
編　　集　　鈴木　貴晴 ｜ 静岡大学学術情報部研究協力課
連　絡　先　　〒422-8529　静岡市駿河区大谷836　静岡大学イノベーション社会連携推進機構
　　☎054-238-4056　　E-mail　syakai-renkei@ipc.shizuoka.ac.jp
ウェブサイト　　http://www.lc.shizuoka.ac.jp/